明治廿九年十二月十日

女學雜誌

第四百卅一號

第四百三十一號目次

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界敎界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	壹冊價金拾錢（無郵稅） 一年前金 金貳圓
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議ノ上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし〇郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

前號第四百三十號目次

女學雜誌

第四百參拾壹號

明治二十九年十二月十日發兌

社説

瀧の川孤女學院

紅葉、霜にうたれて錦繡を成し、映じて流水を染む。諸客連りに其の美をうたふは佳し。但だ之にすら優りたる赤誠の程近く煥發するを忘れんとするは如何に。有志婦人こゝに感慨あり、今度、檄を四方に傳えて、大に此院に贊助せんとす。その文に云く、

『山緑に水明に暑さ寒さほどに適て、世界の樂土ともてはやさるゝ我秋津洲も、地震海嘯洪水などの災害はなか〳〵に他邦よりも多く、其度毎に家屋貨財はいふも更なり、またと得がたき父母を失ひ、飢に泣き、寒に號ぶ、孤兒の數を増すこと、幾許なるを知らず、御仁慈深く渡らせ給ふ　我兩陛下には、限りなく宸襟を惱まさせ給ひて、御救ひの事ども漏る方なく物せさせ給ひ、民安かれと盡させ給ふ、大御心の忝けなさは、仰ぐにも餘りて、かしこしともいと畏こしや。其折折につけて、わが輩も程〻には、助の業に心をよせ來にけれど、そはさし迫りたる飢寒を支ふる計りにて、年たけたる人の、再び產業に就くまでの補には足りぬべし。孤兒たる者はいかにせん、之を保護する父なく、之を愛養する母なし。飢ゑて死るに非ざれば、こゝかしこに飄零へ行き、遂には不良の者となりはてゝ、其身を亡し、世を毒するにも至りなん。世の仁慈厚き人々の孤兒院の設に勞かるゝは、こゝに見らるる所あるが故ならん。斯る中にも其成立より、特性の優れて愛度おぼゆるは、櫻咲く飛鳥山に近くして紅葉に名高き瀧の川の邊なる、孤女學院の設けにぞありける。

院は、去る明治廿四年愛知岐阜兩縣下大地震のころ、今の院長大須賀亮一君深く感動せらるゝことありて、災害地に馳せ行き、實地を探見せられし後、人をも遣はしてあはれなる孤女の內にも、最も憫なる者拾四名を救ひ、同志二名の補助者を得て直に院の建設にかゝられ、爾來つきつぎに憑寄なき者

ともを育みて、今は其數五拾餘名に及べりとぞ。

此院設立の當時、未曾有の天災に罹り、親同胞を失ひ、辛うじて非命の死を免れたる女兒等は、再び轉じて彼の淺ましき人商人の手に墮ちて、濁れる水の身を浸し、死に勝りたる不幸の淵に打沈められんとせしを、斯る慈悲の手に救はれて、茲に堰き留められしより、今は其身の父なく、母なき、無告の孤兒なることを忘れ、只管に君を父上と賴み親しみ、又院内補助の人々は、聊も此世の名利に思ひをかくることなくして、君の心を心とし、力を協せ、身を碎きて、晝夜勞き育まるゝ至れる誠の感化により、此人々をも伯父様、伯母様と呼び、懷き慕ひ、慈愛深き保護の中に春秋を過ごし、衣食に事は欠ぬばかりかは、學事に實業に何くれと漏るゝ方なく、懇切に教授せられて、すでに五年の星霜を經たり。其志操などに至りては、世の父母ありて教養せられたる良家の娘子とくらべて、勝るとも劣らぬまでに生ひ立ちし、此女兒等の幸運なることは、世の貧家の女兒と霄壤も啻ならざらむ。

君は常に恭謙を以て己を持し、遜讓を以て人に對せられ、問ふ人あらば、院を以て、單に一慈善事業の如く告げらるれども、一度彼院を訪ひて、其情況を察すれば、尋常の慈善事業と大に異る所あるを知るべし。君は極めて質素なる家作りの内に住居し、側に堆く積み立られたる和漢洋の書籍には、幼稚、小學、普通、高等の教育に關するものより、哲學文學等或專門に屬する類ありて、平素いかに君の學事に其意を注がるゝかの一斑を伺ふに足る。

曾て君の擔任せられたる女學校に代ふるに、此院を以てせられたる其意の存する所は知るを得ざれども、密に想ふに一朝の天災、君の至仁なる天性を激發して、院の建設を急ならしめたるに似たり。然るに女兒に限られたる所以は、我國道德の根源を清くせんとを望まれ、且我女子教育の基礎固からざるを歎きて、熱心に斯道に從事せんとせらるゝにはあらざるか。女子教育の、家庭と學校と其趨勢を異にするより、其勞に償する効なきを歎くは、教育者一般の感なり。君茲に家庭と學校とを一にして、女子天賦の稟性を平等に啓發せしめ、以て女德の涵養を計り、併せて諸般の學科を悉く自から教授し、普通の女子教育所にて、爲能はざる所を茲に實施し、他にて試み得ざる物を茲に探究し、出所異なる數多の女性につ

きて、これを實地に應用し、古來教育上に卓偉の功績ありし諸大家の爲せりといふ、教育試驗所を學ばれしにはあらざる乎。創業より今日に至る迄の成績は、妹等が聞得しこと而已にても、枚擧に遑あらざれども、茲には其二三を記さん。

一院に來りし當時は、いまだ一文字すら解し得ざりし者といへども、稍や年長にして、心ばへある者は傍ら女子に必要なる職業を兼ね修めつゝ、四ヶ年間に尋常高等の小學科を卒へ、今は中等の教育を受くる者あり。其作文の秀絶なること、いかに教導に意を用ひらるゝかを伺ふに足れり。

一天性魯鈍の者といへども、其稟性に隨ひ、心理學上の刺激法を用ひて、知能を啓發せられしにより、終に其性を一變するに至りしものあり。

一不幸にして病などの爲め、世に白痴と唱ふる不運の身となりし者は、一層に君の心を刺激して、慈悲の情と不撓不屈の精神とを以て、これが啓發誘導を試られしより、今は尋常小學の科程をさへ卒へ、何の女兒か不具の者なりしを知ること、能はざるに至らしめられし者あり。

子ゆゑの闇には迷ふといふ、たらちねの生の親にも勝りたる、至仁至愛の君の心に、これら五拾餘の者のうへを思ひ煩はること、たとへんに物なく、若し小供等の病に罹ることあれば、通常の家庭にては、及はぬばかりの、手厚き看護を受けしめ、平素無事の時とても、一週間内必ず一度は醫師を迎へて、彼等を診斷せしめ、且時々體量をはかりて、發育のいかんを試らるゝなど、注意至らざることなし。又他日彼等の授産の爲にとて、近傍に地所を購ひ、養蠶の事業を起さんとの計畫さへせられしことありと。されどそは少からぬ費用を要することなれば、未だ其運にも至らずとかや。

妹等が淺き心を以て、院の眞相即ち大須賀君の理想を、伺ひ知り得んとは、及びもなき業なれど、聞得しことの略ましと、自分の所感を述べて、世の兄姉の君達の同情を乞ひ求めんとするものは、今日世界の文明國と唱ふる國々と雖ども、其裏面を伺ふ時は、一に長ずる所あれば、これに伴ふ短所ありて、いまだ完備なりといはるゝもの一としてあらざるべし。加ふるに其國の美は、國人の思ふ程には、外國人の目に見えぬが常なり。他の國を評する者は、自から得たる處を以て、

彼我を比較し、徒らに輕評を下す而已。我國古來道德の淵源いかんは今玆に論すること能はざるも、我女子の自ら守る一點、即ち女子特々の稟質なる其德操に至りては、他の國々に勝るとも劣ることなしと、自から許す所なるにも拘はらず、世界に我國女子の知らるゝ所以のものは、其長所と信ずる所にあらずして、身敎なく人の人たる道をも辨まへざる、下流女子のいと忌はしき振舞ともなり。思ひて玆に至る毎に、冷汗全身を濕ほす。諺に其國の眞價を知らんと欲せば、先づ其女子の位置と情態とを見よと。それ積まんと欲して、崩れ易きは人の德なり、一個人に於て然るが如く、社會道德に於ても、亦然るならん。外人の我國女子を評する者、これら下流の女子を以てすといへども、これら下流に立てる我同胞の、此の如き、汚名を世に流し、邦家の體面をも穢んとするを、國民として輕々しく看過することを得べけんや、抑々斯る者の生じ來るは、幼にして父母の愛養を蒙ること能はざる、孤女などよりして起るならむ。而して此點に注目して、設けられたる敎育のこと、慈善のわざ、世上其形の備はらざるにあらされど、其數あるに比して其効果少なく、外は愈擴張すれども、内は益困難を生ずるがごとき觀あり。其因緣する處、何れにある乎、事概ね外形に失し、其中心を維持すべき確乎たる精神に乏しきが故なる乎、同志の人々の一致團結し難きが故なる乎。

然るに此院のごときは、世にも稀なる例にて、其精神の鞏固なると、其團結の純美なる、只管感歎の外なきが上に、他に於て見る能はざる敎育上の卓偉なる効績さへ、いと昭らかなり。苟も國家を思ひ、女子敎育の淵源を極め、其進歩を希はん者は、宜しく此院に同情を表し、共に〳〵此等の不幸なる女兒を救濟せんことをつとめ、併せて此院の事業、益盛大に赴き、とこしへに續けられんとを計るべき事とぞ思ふ。そは實にわれ〳〵の義務ともいふべくして、進みては、大君に忠を盡し、退きては自己の體面を淸くすべき道に外ならず。加ふるに、未だ自ら支ふるに途なき、幼稚の者なれば、孤兒の救濟ほど出費多くして、慈悲の助けを待つの外はあらざるべし。さるを此院設立に要するよろづの費用より、五ヶ年の今日に至るまで、眞實の同情を有する内外人の時に臨みて、寄附ある外はすべての費を、君のひとり義捐して、今は其所

有せられしものを擧て、院に寄せ、貧を人と分ち、苦を擔ひ、　皇天の命をまつとの、潔き信仰を以て、何事も只身一ツに堪へ忍はれ、其常の言草に萬止を得ずして、飢餓に迫るかごとき慘狀に陷ることあらは、まづ自から斃れて、かゝりにも父と呼ばれ、子と思ひて幾多の年月を共に過し、膝下に撫愛したる小供等に對して、親の親たる義務を盡し得ざることの罪を謝せん、而已。其機に臨みなば、世の仁人これらの親なき可憐なる孤兒等を、顧み給はざることはあらじと。斯る決心よりして自らは、節儉を主とし、身を苦しめらるゝより、時に其健康をさへ傷めらるゝことあれど、其人生を愛せらるゝ熱情と、天に向ひて號泣せらるゝ血涙とは、　皇天のこれを空くし給はず、桃李物いはず下蹊を爲し、沈默能く辨ずとの謂に違はず、求めざるに來り、訴へざるに集りて、多くの孤兒等に至りては、未だ一度も寒に苦しみ、飢に泣くがごとき困難に迫りしことはあらずとかや、此院天祐の一證なりとて、或人の語られけるを聞ぬ。そはさることながら、限りある財源にむかひて、限りなき要求あれば、君の苦心の程、實に名狀すべからざるものあり。邦家の爲、敎育の爲、貴重なる君の身躰を、國民一般の負擔すべき孤兒救濟の爲に、傷はるゝをよそに見んと、人の情ある者の忍び得る所にあらず。』

妹等亦一度此院の事跡を傳へ聞きて、世の爲め、殊に我同性の爲め、負ふ所の感恩の情と、時々院を訪ひ音づれて、幾多可憐なる女兒等の有樣、さては彼女等の、一人〳〵の身の上に有する、いともあはれなる履歷をきゝては、一入に同情の涙堰きあへず、自ら爲し得んかぎりは、補助の手だてをも試みたれど、微力なる妹等の爲せりといふは、只だ名のみにて、其の實は大海の一滴にも若かざるより、院の事情思ひやるごとに、日夜憂慮に堪へがたければ、茲に我同胞に訴へて、力を合せ、金を醵して、彼の院に寄せんことを希ひ、又折〳〵は妹等が手すさびに造り出せし物と、かなたこなたの學びの窓に通へる、女子等の物せし品々とを以て、慈善市を開き、其價をもかしこへ寄せんとす。世の慈悲深き兄姉の君達よ、冀は、妹等が微衷をあはれみ給ひて此等の擧に御力を添へ贊助を給はらんことを只管乞ひ參らするになん。』

廣く世間同情の仁者に告ぐ。冀はくは此の發企に熱贊を寄せて、美なる此の院の擴張に喜捨せらるゝその太はだ厚から

んことを。謹しみて祈願を寄す。編者敬白。

家庭

牧師の妻

如雲

昔しは團十郎、歌つて曰く、錦着て疊の上の乞食哉と。渠、錦繍を着て榮耀を盡し、白粉を附けて美人に愛せらる、傍觀者の眼より看れば結構此上なきが如けれど、其の自から白状する所を聞けば、悲調即ち如此し。之に反し、橋の下の寒風に身を劈き、襟もとの虱にゾット寒氣を催して、僅かに檐下階前の自然の天光に温たまるの外なき襤褸の乞食は、心ある人の見て哀を催ふすところ也。然るに渠等は太だ得意に揚言して曰く、此の境涯に身を置くこと三日、其味、遂に忘れがたしと。嗚呼、人生の幸不幸は見かけによらぬもの也。直に當人意衷の秘密を探らずんば、未だ容易すく傍觀の批評を施す可らず。左れば、世人みだりに羨やむ莫れ、亦又みだりに歎くなかれ。

宣教師派女學校の女生屢ば密かに語りて曰く、男子生れては執金吾となるべし、婦女子生れては、牧師の妻となるべしと。蓋し、牧師の妻は、彼等が理想たるなり。温柔なるは羊かひの如く、信切なるは聖人の如く、偏に他の涙を拭ふて、慰藉して世の煩悶を取去らんとせらるゝ有がたき御方の家庭に入る、人生の幸福何ものか之に及ばんと。彼等が之を慕ふは、無理ならぬこと也。

左れど、其の實狀を知るものは歎じて曰く、婦女子、人の妻となりて憫れむべきもの二つ、幇間の妻その一なり、牧師の妻、その二也と。あゝ是れ何の謂ひぞ。

凡そ人情を知り悉し、世事に勘辨ありて、忍耐辛棒の強きこと、幇間と、牧師との如きは稀なり。其の人に對するや、圓滑にして巧妙なり。其の應接に言ふや、信切にして鄭寧なり、心掛の優しきこと痛める葦をも折らざるが如し、思ひ遣りの濃やかなるは、煙れる麻をも消さゞるが如し。凡そ相撲取を夫に持ちたる人の愁歎は、古の淨瑠璃に於て聞く。幇間と牧師との如く人に信切なる男子の妻となり乍がら、而も不平を怨

ずるは、豈に婦女子たるもの丶過ちにあらずや。

吾人ひそかに此の感あり。熟ら實狀を吟味して、少しく得る所なきにあらず。密かに惟へらく、是れ男女一方の過ちにはあらず、其の過ちを言はば、即はち、緣にあり、其の功を言はば歸する所ろなきにもあらず、寧ろ如かんや双方些さか勘辨して、今少しく其の實際を幸福にし、兎に角、其の家庭に最初の平和を來さんにはと。

幇間露八、醉ふて家に歸り、細君が買ひ置たる干瓢を冠つて、石橋の舞を爲す、爲めに大喧嘩を起せりと。此類の事は、吾人が暫らく關せざる所なり。吾人は玆に先づ牧師の妻に付きて言ふ所あらんとす。

蓋し思ふに、牧師君が家庭の、理想ほどに面白からざるは、男女双方の所望の多きに過るが故也。かの幇間を見よ、彼が宴席に出るや、人に馬鹿にせらる丶をもて商賣とせり。故に其の家に歸るや、切めて吾家だけにては威張たしと思へり。則ち、外に於ては、愛嬌至極の通人が、家に入つては、專制無器用の八釜しやとなる。これ然し乍ら彼に取りては慰藉たる也。然るに細君は亦た細君らしき所望あらん。彼人、生れ乍らの愛嬌をもち、一言いひて人を滿足さする口前を持ち乍ら、妾に對して計りは邪見此上なし、お隣りのおかみさんにさへ、あれ程の世辭を言ひ乍ら、私には一言の優しき言葉さへ掛けられずと。これ即ち細君たるもの丶不平なり。凡そ、幇間の家に於て在る所の不平は、即ち牧師の家に於て在る所の不平なり。異なる所は、其の形容のや丶上品なることのみ。人情は千古同じ、他山の石亦た吾玉を攻くべくんば、玉の如き牧師夫妻の關係といへども、幇間の家庭に鑑みて其學ぶ所に學ぶに、何の恥辱かある。

夫れ、牧師たるもの丶勞苦平常ならんや。疳癪を抑へて生意氣者の平理窟を聞き、諄々として說法せざる可らず。聖人も時に腹の立つとあれども、牧師は常に忍耐して青筋を隱さゞる可らず。信仰は少けれども、年代の長きによつて功者風する長老執事などの機嫌も一應は酙酌せざる可らず。會堂に寄附金する金持の家には時々出這入せざる可らず。おぢいさん、おばあさんに、辛棒づよく話さゞる可らず。成るべく、にこ〳〵せざる可らず。成るべく、鄭寧にせざる可らず。斯の如くして、人の休む日曜日には最とも働らき、人のホツト息す

べき土曜日には長き祈禱をせざる可らず。牧師たるもの丶勞苦、尋常ならんや。左れば、渠は思ふべし、切めては、家に歸りては默つて居たしと、何んとなれば、シャベリ續けの人にあつては、默するヿが則ち慰藉なれば也。又思へらく、切めては、家に歸りては、天眞爛熳に、尙ほ少しは我儘も仕たしと。何となれば、愼しみ續けの人にあつては、我儘するヿが即ち慰藉なれば也。あまり鄭寧の言葉のみ使ひ續けたる渠に取りては、少しは不用意の亂暴も言ひたし、ニコ〱計り志たる身に取りては、少しは、ツト仕たし、何となれば是れ其の變化にして亦た慰藉なれば也。嗚呼、牧師、家に歸りての豹變は即ち其の必要に出づ、即ち是れ家庭に安きを得るの所望にして、實は氣の毒なる要求に外ならず。

左れば、牧師の妻たるものには亦夫れ相應の要求あり矣。蓋し見よ、牧師の家は倶樂部の如くならずや。秘密あるヿを許されず、かくれ塲あるヿを許されず。何時にても來客あつて人の往來は市塲もしくは役所の如し。男子は寧ろ之に忍ぶべくも、女子は殆んど此に堪ふ可らず。其の精根の過半は、之が爲に消し去らる丶也。時としては、嗟嘆すらく、嗚呼〱少しは、ゆるりと休むべき隱れ塲の欲しさよと。夫れ、たとひ隱れ塲はなくとも、良人と唯二人ゆるりと相語るべき靜の日にてもあるヿならんには、猶ほ忍ぶ可きに、彼の倶樂部然たる出入はげしき家に於ては之を望むべくもあらず。彼女は殆んど倶樂部づきの下女の如き生涯を送るヿ多し。

加之、彼女は屢ば思惟す、良人、あれ程に他人に信切なれば、妾には今少し優しくあり玉ふとも不可はあるまじきにと。たとひ、人の世話をたまふは天職なりとも、人の世話に限りはある可らず、少しは吾家の爲めに餘力を遺し玉ふとも不可はあるまじきにと。而して、一種の嫉妬は、無意識に逍遙し、をかしき姿を取りて出でて、數會員の間に徘徊す。もとより汚らはしき疑をもて吾良人に挾さむにはあらねど、其の第一の愛を得ざれば滿足せざる婦女子の情としては、自から、良人の行爲に種々の掛念なき能はず。其の限りなき信切は、半ば敬重し、又半ば惜しむ。人間もと二樣の心緒の入れ亂るるものなれば、牧師の妻たるものに、此邊の情懷あるは、寧ろ人間らしき弱點ならん。

左れば、双方の要求する所、同もに尤もにして、何れにも

無理ありとは言ふ可らず。然し乍ら、双方無理ならずと言ひて、同もに之を賞賛するも、不平の遂に絶えざるを如何んせんや。故に、牧師及び其の夫人に告ぐ、卿等が所望決して理なきにあらざれども、そは尋常の理のみ、此の尋常の理によりて相ひ要め、互ひに不平を言ふは即はち靜間の境界にも之れあり。諸君すでに尋常以上の地位に立んとする以上は、亦た尋常以上の覺悟なかる可らず。卿等もし互ひに地を替へて翻つて、反對の身分となり、妻にして其の良人に代り、良人にして其妻に代り、以て双方當然の要求のある所を經驗しなば、即ち其の要求の無理ならぬとを覺るべし。要求互ひに無理ならずと覺らば、即ち互ひに一歩を引退き、先づ自から要求を減じて、他の所望を容るゝことゝすべし。果して然らば、不平自から來らん。幸福亦自から來らん。何となれば、既に要求せざる者の上に自づから來る他の信切は尤とも忝なきものなれば也。

名士の子に愚物多し

甲府に遊べる時、市内知名の人々懇親會を催さる。席上にて演説せるその一節、

駿甲鐵道は二年の後に落成し、中央鐵道は七年の後に成就すべし。並山の甲斐の國と云はれて四方を塞いだる此土地も、遠からずして、交通至便、往來頻繁の都となるべし。

文化文政この方、維新の後數年に至る迄の女の髷の變遷を取調べたる人に聞くに、昔しは頂點に載せたるが次第に下り、凡そ後腦の方一寸五分位も低くなれりとぞ。九十有年間の變遷にて、僅かに一寸五分の地位を動かすに止まるとは、變化も亦た少なからずや。

余は東海道の滊車の未だ出來ざるうちに西京へ遊歴したるとあり。名古屋より以西、次第〳〵に上方風となり行きしが、遂に西京に入つて見れば、女の頭の格好、千態万狀、起伏波瀾驚くべし。下女の髷あり、細君の髷あり、十五六の娘の髷あり、十八九の娘の髷あり、島田あり、島田に後尾の如きものゝ附きたるあり、後家の髷あり、喪中の髷あり。殆んど名狀す可らざる程、多種多樣にてありき。

然るに、現今の有樣は如何なりやと聞くに、殆んど皆な東京風に模して、すべて髷の形に維新の改革あり。十數年前の上

方風は悉皆消滅したりとなり。

何によつて爾く速かに變化せしやと云ふに、最大至强の原因は鐵道の通ぜしがゆゑ也。鐵道一走して、東西比隣の如し、今晩昔の江戸を出でて、明日の晝飯を西京にて食べると云ふ程の便利となれば、昔の一町内の交際よりも尙ほ近所らしく思はるゝ也。

左れば、數百年間毫も變化なかりし古風保守の土地にても、もし汽車一走して、他の繁華なる都と自由の交通を爲すに及ばは、風俗人情、俄然として變はるべし。

此の風俗舊變の時は卽はち風俗墮落の時なり、人情激變の時は卽ち人情浮薄の時なり。總べて制裁德義は、保守固定の氣味合にて出來るものなるに、世上の形勢皆な移り變る時となれば、風俗も人情も自から惡しくなるべし。

此の一時の墮落は止むを得ざることにて、決して驚く可らず進步の道行には莫る可らざるものなり。たゞ豫め勘辨して、出來る丈け其害を防ぐの工夫こそ肝要なれ。

其工夫の第一は、他なし、家庭の感化力を强くして、家外の惡風習に勝ち、就中、家の子をして其の惡感化に染ましめざるにあり。之が爲めには、家庭の勢力を調ふるは甚はだ大切にして、其の責任は女子にあり。女子をして此の責任を盡すに堪へしむるは、敎育にあり。

且や、文明の器械具備して、交通、交際より、商賣取引に至る迄で、總べて文明流となれば、事物の繁忙は數十倍となるべし。名士はいよ〳〵繁忙を極むる也。

名士いよ〳〵繁忙にして、其の家庭に於ける感化力は彌よ減ず。ゆる〳〵落付きて團欒會話し、知らず識らざる間に子供の上に感化を與ふる如きことは迚も出來ざることとなるべし。凡そ名士の家に善き子の少なきは、此邊の譯合によることとなるが、此後の名士の家には、いよ〳〵然あるなるべし。尤とも、名士に賢明の內助ありて、夫人の感化力だに强からば、左樣の事はあるまじけれど、惜しい哉、今の名士は大率ね姿、形の美人を娶りて、心の美人を迎へず、之によつて其の家庭の內は裏店の如し。名家續々愚物の子を出すは、不生產の極と云ふべし。

故に余は斷言す、凡そ鐵道を架設する程の地方に於ては。同時に女子敎育を隆盛にし、家庭に於ける婦女子の感化力を强

大にして、風俗人情大墮落を豫防するの工夫を致し、併せて、世の流行子となりて繁忙極まる名士とならるゝ人々の家に、永く寧馨兒を出さしむるの根柢を造らんとを。

改革せざる改革

同前、甲府に於て、山梨英和女學校に演說せろ一節、

武田信玄は武骨一遍の武人にあらず、經濟、政治に心掛深き名將なりしゆゑ、甲斐一國の制度は經營慘澹たる周密の工夫に成れり。然るを、織田の家來河尻秀隆が此處に來りて忽まち改革を唱へ、暴りに在來の政治を改ためんとしたりしかば、百姓は怒つて蜂起し、遂に之を逐出したり。家康公は、左る輕率の人にあらず、兼て信玄公の政治には注目せられしものと見え、天正十八年關東入國の時迄に、前後七度も甲州に遊歷して、治水、採金、大小切などの制度を調査し、江戶の政治にすら適用したり。如先規、如前々と指揮して、毫しも舊習を改ためざると共に、別に文學奬勵の道を開き、久しうして自然に人心を化し、遂に甲州人の氣性を一種の江戶子氣質となしたり。

味噌の味噌くさきは好き味噌にあらず。改革々々と揚言する改革は、到底眞の改革とはならざるもの也。既に形跡を見し、既に人心を騷がせる樣にしては、大なる改革は出來ざるもの也。一家の改革といへども亦然り。

女學生、數年の學問をしたりとて、何程の學力かある。出でて直に改革などと稱するは以ての外なり。凡そ、彼等の誤謬は、昔しの婦人には、學問なかりしと思ふが、間違ひの元となる也。昔しの婦人には、讀書の學問はなかりしとも、實地の學問はありし。實地の學問が即ち實地の學力にあらずや。左れば、舊家、舊家庭に入つて、容易に之を輕んずるなどの輕薄ある可らず。

其の形を改革にして、其精神を元の如くにするは愚也。其形を元の如くにして、自然に其の精神を改革するとを賢とす。ましてや、女の改革沙汰は、亦た女らしく優美にせざる可らず。壯士的の改革は第一の禁物なり。

室家の音樂

鷗村

凡そ家庭の娯樂を助くべき遊戯には、其種類幾通りもあることなれど、中に就きて、最も興味の多く、最も有益に、家庭教育の補ひとなることの尠くないものは即ち音樂であるなり。譬へば家族團欒の夕に當りて、良人は日中忙しかりし業務を了へて、外より歸り來り、細君も亦家政一日の苦勞を忘れ、子女は終日の學問遊戯を休みて、共々に膝つき合せて、或はカルタを鬪はすこともあるべし、或はまた御伽譚を話すこともあるべし、何も樂しからぬはなきが、其時もし細君なる人の、風琴か、ヴイオリンか、乃至手風琴かを奏でゝ、子女の之に和して、出來るならば良人も共々に、『雛の林』でも『春の彌生』でも合唱するならば、其場の樂しみは、一層優美で高尚に、皆々の胸中は、鬱を散じ、勞を癒して、愉快此上もなき思ひをするならん。

記者は嘗て學校に於る音樂教育の進歩せしむべき理由を論じて、本誌に載せたるが、今はまた、我國の家庭に音樂の聲の充ち溢るゝに至らんことを希望するよりして、更に述ぶる處あらんとはするなり。音樂が家族團欒の快樂を補ふことの、頗る多き點からばかり見ても、家庭には之を入れたきものであるに、音樂の性質からして、今之を盛んに家庭の中に入るゝときには、またこれが家族の者の精神を薫陶し、兒童の家庭教育に大したる効能のあるは疑ひもなき事とすれば、音樂の流行少き我國の家庭には是非共之を採用せねばならぬなり。理屈は扨てをき、音樂が何程人心、いな人心のみならず鬼神、禽獸をも感動せしむるかといふことを、事實より昔語より擧げていへば、昔し琵琶道に其名高かりし平經正は竹生島の明神の社に詣でゝ、月明の夜、心を澄ませて、上玄石上の秘曲を盡して、琵琶を奏でければ、經正が袖の上に、白龍現じて見えさせ給ひしとかや、この故事は今なほ畫人の好題目として傳へられたり。またこれも昔に、篳篥吹遠理といへるもの、父の阿波守に從つて、其國へまかりし年、天大に旱魃して、諸民雨乞の御祈禱に丹青を抜んづと雖ども、其甲斐なかりけるに、

遠理は、神の社に詣で奉幣終りて、調子兩三度吹きすさびしかば、祈請の間、俄に唐笠ばかりの雲、社の上におほひて、忽に雨降り、やがて洪水ともなりたりと傳へたり。以上二ヶ條の昔語の如きは、實らしからず思はるゝことなれども、音樂の妙、神に通ずるには、さる不思議もあらんかし。

また昔支那の某は琴を彈ずれば、野の秣飼ふ馬が、首を擧げて之を聞きたりといひ、また獨乙の某は、或る城の門を入る時、其處に獰猛の惡犬ありて、隙を窺つて噛み付かんとして、物凄ましかりければ、此人は心を靜め、傍の石に腰かけ、手にもちたりけるバイオリン取り上げて、秘曲一段を彈ぜしかば、流石の惡犬も、狂ひ騒ぐをやめ、尾を垂れ、頸を下げて、これに聞きほれ、遂に靜に此人の入門を許したと聞く。情なき禽獸蟲魚の類でさへ、微妙の音樂には感動を起すといふに、況して如何に愚しきものとても、いやしくも有情の人間たる以上、妙絶なる音樂に、其感動を惹起されざらんや。いと舊き昔の事に、小亞細亞地方にイスラエルなる國ありしが、其國の第二代の王、ダビテと呼ばれしは、古今の歴史に於て、賢明聖德の君にていまし、また音樂の技に妙に、且つ詩人としては千古に秀で、其詩の今日に傳はれるものは、英國の大詩人ミルトンでさへ、到底企て及ひ難く優れたるものと許せし程なり。此王の、猶年少うして、野に羊を牧ふてゐませし頃、時の國王サウルといふは、極めて壓制頑固の君主にてましませしが、或時此王いたく精神の病に罹られしに、ダビテ立琴を彈くに妙なるを聞き及ばれ、呼び出されて、王の前に其妙技を奏でしに、王の病は忽ち愈えたりといひ、歴史家は、此事を記して、ダビテ立琴を彈きて、サウル王より惡魔を逐ひ出したりとはいふなり。實に不思議にもいみじかりし事なり。然るに斯樣の事は今日にても、なほ見聞せられ得べき事にて、

獨乙國または亞米利加合衆國にて惡性の少年男女を、善性良道に感化教育するが為めには、種々の學問は素よりの事、宗教に基づきたる實踐躬行の倫理の教訓もさることながら、殊に音樂は最も必要の教具として、其必要の認めらるゝ丈けに、其効能に大なるものあるなるは言ふ迄もなき事なり。知人某氏曾て米國に漫遊したる時、其南部諸州に巡遊して、某地の或黒人を教育する為めに設立せ

られたる學校を參觀せしに、日々の學科の頗る音樂に重きを置けるを見て、其理由を尋ねたるに、其學校長は答へて、彼黒人の男女少年を敎育薫化して、善良温順の人間たらしめんには、大に音樂の力を仰がざるべからずといひしとぞ。

元來黒人といふものは

奴隷解放以來も、矢張り奴隷根性は失せやらず、例へば日曜日に敎會に出で、讃美祈禱し、難有き說敎を聽聞して、隨喜の涙を溢した、其歸り路にて、他人の家の鷄を盜みて、平氣にブラ下げて戻るといふ調子にて、さる卑屈な、曲邪な性質は、子々孫々に遺傳しつゝあり、其の子々孫々を善化し訓育する爲めの經驗によれば、音樂の力が、最も大なる効能を奏すとはいふなり。實に音樂にはさる力の有るものなり。音樂は武きを和げ、歪れるを正し、怯るゝを勵ます事、歷々として、世は其實證の多くを有す。

音樂は調和の結べる果なり

されば家族の間にこれが響の歡迎せらるゝ時、不和不平の心の互の間に擁かれてあるべきやは。音樂の家庭に入るときは、皆人の心を慰むるの樂しみとなるのみならず、また之を和らげて、平和の種子を蒔くものとなる。美妙なる音樂を聽くときには、精神澄みて淸らかに、身體胖に、氣宇濶きを覺え、この聲の響く家庭の空氣は淸淨なるべし。さればまた是れなるものは、兒童の家庭敎育の上には、彼等が精神に溫和優長なる點ありて、ノンビリしたる性質を有せしむるの媒たると、穴勝に買ひ被りたる勘算にてはある間敷なり。

幼稚園または小學校等にて

唱歌を敎ふる譯は一つには、小兒の聲音、聽力の發育をよくするとにてあれど、また一つには精神の上に良き感化を及ぼすの効用ある積りにてはあるが、兎角實際には、其結果多からで、到底家庭に音樂の聲を鳴り渡らしむるが上の結果に若くべくもあらぞ。

然るに我國の家庭は、古來音樂の缺乏を訴ふるものなり。勿論、琴、月琴、三味線等の、音樂が社會階級の等差相應に、娘子達によりて、其家庭に輸入されつゝあり來つたかなれど、前述べたるが如くに、これ等は個人的の技にて、娘子供のたしなみとして敎へられて、

家庭全躰の人の

樂となるといふことは、いと乏しくて、從つて小兒の精神を薰陶するといふ意味に於ての家庭敎育の要具として用ゐられることは極めて稀であるなり。殊に三味線の如きは、端歌長唄やうの、年若き娘の口からは、聞くさへ耻かしきものを歌ひつゝ、彈く調子は淫靡で、昔から士人淑女の間に弄ぁそぶべきものならずとして賤しめらる。下等社會の小娘共が之に稽古の苦勞を積むは、會々以て彼等をして、早くよりみだらなる風流事を解せしむるに至ること、甚だ痛むべきの事であり、家庭の音樂として決して受け入るべきものに非ず。元來音樂は人を感化するの力を有するものなるを以て、正しき音樂には良感化を與ふと雖も、之に反して正しからざる音樂の感化は、また忌むべく、嫌ふべきものあり。

琴または笛の如きは　優美の音樂にて、優美の情致を養ふに足るべきものなれば、在來の琴笛樂に、改良を加へ、高尙の趣味を附すること多ければ、家庭に入れて其空氣を淸潔ならしむる價はあり、然れども此等は、一方には個人的の技であると共に、また通俗で小兒にも面白いといふものでなければ、家族のものが、集合一致して、共に樂しむといふには、通俗なる唱歌を以て第一となすべし。音樂などは、單に聞くよりは、共にする方に、多分の面白味のあるものなり。されば一處に遊ぶといふ趣意から成り立つて居る家族の團欒の折りなどには、合唱する唱歌の方に興味多きはいふまでもなし。假令樂器がないにせよ、母が聞覺えの譜節、小兒が學校等にて習ひ得たる唱歌をば、一家團欒の旦夕に合唱せんことを奬む。音樂の聲の嚠喨と響き渡れる家庭は、さながら小鳥囀る春の空ののどけさあり、外聞にも其の樂しさの程の思ひやらるゝに、まして一家の和平那計りぞや。その和平が那計り兒童の精神を薰化するとなるべきぞ、況んや人心を和らげ、之を淸らかにしまた、之を壯んにせしむる音樂の感化力のあるに於てをや。音樂の趣味を喜ぶことを知らざる位の家人の寄合へる家庭の如きは、勿論乾燥無味にして、さる處にて快味津々として盡きざる家庭の和樂のあらんことは迚も覺束なき次第なり。

記者の嘗ても論じたるが如くに、今の世の

青年または少年の男子は　世の中の氣風につれて、敎育の成績、兎角粗暴野鄙に流るゝと

ありて、寛大優長の氣風に乏しきもの多し、今これ等の教育に音樂の趣味を加へなば、必ずや良結果あるべきなれば、家庭は甚だ此點に注意せずばあらず。殊に女子には、家庭教育、學校教育ともに、勉めて音樂の趣味を得せしめて、優美の氣風を養成すると共に、また彼等によりて、音樂の盛に家庭に輸入せらるゝやうになしたきものなり。

子供の言葉

小兒がポチャ〳〵と囀き出す時分は、まことに愛くるしさの盛りにて、其言ふヿの可笑しきより、大人も面白がつて、其口眞似をし、小兒の片語を間違ひなりに、やがて用うる習ひなれど、そは小兒に言語を教ふるが上にいと誤りたる事なり。小兒は大人のいふヿを眞似て、正しく言ふ積りにてあるなれど、舌が廻らぬ故、可笑しき句調となるかなれど、當人はそれでも勉めて正しからんヿを欲しつゝあるなり。夫故に其片言を此方で眞似して用ゐれば、當人へは却て通せず、承知せず。それにもかまはず大人の方で、片言を用ゐなば、小兒は

正しき言語を知るの期の、段々に後るゝなると譬へば學校にて語學の勉强をなす生徒が、初の程は、中々に正しき發音の出來ぬものなれど、其心では飽まで正しからんを求めつゝあるものなるに、教師が却て變則音を用ゐなば、生徒は何時までも變則しか知らぬが如し。されば、さあ習へとこそは命ぜられ、小兒は、大人の言語を成丈巧みに眞似んものと、それで自國語學の勉强をなしつゝあるなれば、其時は教師たる大人は、正しき言語を用ゐて、小兒の片言を正すやうにせば、小兒は自然とそれを口うつして早くより正しき言語を用ゐるに至らんなり。

桂を燒き玉を炊く

身は金殿玉樓の裡にこそ住まはね、桂を燒き、玉を炊ぐとは雲の上人のそれならで、雨露を凌がん住居だにもなき、賤しき貧民乞食のなりはひなるぞ哀れなる。『時事新報』が記する處によりて、貧民一家の經濟の狀態、察つせらるゝに餘

りあれば左に之を拔錄す。米の値段が何程するやらも知らぬ御人達はなほ更よく御覽ありたきことにこそ。

貧民社會は所謂貧乏者の子澤山にして、苟も妻帶の者に二三人若くは四五人の子供なきは少なし。左れば其生計は一入の困難を感じて、日々窮鬼に追ひ迫られ、一錢をだに蓄財し能はざるも、亦無理ならぬ次第といふべし。今假りに其業の何たるを論せず、一日二十五錢の稼を爲す者にして夫婦に子供三人もある家の日々の暮し向きを察するに其收支大凡左の如くなるべし。

家賃日掛にて	二錢
蒲團損料	三錢
新小束	一錢五厘
量り炭	一錢
醬油	一錢
たくわん漬一切	五厘
にしめ（ひじき　おから　さといも）又は鹽魚	二錢
酒コップに一杯代　但し之れは亭主の草臥休め	一錢五厘
白米一升	十四錢
合計	二十六錢五厘

以上は亭主が一日二十五錢宛の稼を爲す家にて日々缺くべからざるの費目なり。收支往々償はざることあるのみならず、雨風若くは病氣などの障りありて、鼻の下空殿の建立中々に多事なり。是に於てか、

三日質

といふもの丶必要あり。三日質は、又の名を三日バッタリと稱し、三日限りに受出さゞれば、忽ち流れとなるの定めなり。其質物は先づ手拭一筋五厘、古下駄一足一錢より二三錢、車夫の古毛布三四錢より七八錢位なり。其他何品に限らず、質に出せど、金高は五厘より十錢が留りなるべし。此三日質は普通の質屋にては取扱はず、大抵は古物商などなるよし。

貴族的の家政學の研究もよけれど、かゝる貧民の家政法も亦、いと心して見るべきに値ひせずや、いかに。

講義

彈力機關車の發明家、關水春吉氏。

岩野泡鳴

爰に女學雜誌讀者諸君に世界未曾有の發明家を紹介せんとするに當り、先づその發明したる彈力機關車の何物なるかを一言せんとす。

抑もこの種の機關たる、泰西の學者大技師の之を工夫して、遂にあり得べからずと斷言したるものなり。見よ、如何なる機械と雖も、現今使用さるゝものに。外來の動力を借らずして、その運動を繼續するものありや。人力を以て運轉するものは勿論、風力水力火力に賴て起るところの電氣蒸氣等の諸機關の、これら動力を斷つと同時に、その回轉を止むるは、

物理學上、摩擦と空氣の抵抗と物躰の習慣性との理によりて既に吾人の知れるが如し。ひとりこの機關に於ては然らず、その一たび受けたる運動は、適宜に之を妨遏するにあらずんば、永遠無窮に絶えざるなり。是が構造は、未だ秘密のうちにあるを以て、公言する能はざれども、滊車にあれ、軍艦にあれ、如何なる大仕掛のものも、たゞ僅の水銀と空氣との間に起る彈力を應用して、之が運轉を停止せしめず。故に之を彈力機關車と名づけしなり。

今やこの大發明の成就して、こゝ數日の內に其筋の特許を受けんとす。もし世人の廣く之が利益を知るに至らば、地球上の工業社會はその土臺を一變せむ。これ他にあらず、その構造の單純にして簡便なる機關は、風水の力を待たず、火力の素たる燃料石炭を要せざればなり。

關水氏の爰に至る、殆ど三十年、その苦心大に感嘆すべきものあり、予の鈍筆を試みんとするも、亦是が爲めなり。希はくばその一斑を語らむ。

氏は天保十四年三月相州高座郡福田村に生る。家は農なれども、武道に於てまた達する所あり。近頃の事なりき、或大弓場に至り、六本の矢を取て、その三本を大小三個の的に當て、あと三本のやりどころ無きを以て、再び同じ的の各々に射立てしといふ。少にしてより養蠶の業に從事し、氏は是に關しても亦一の發明を爲したり。蠶病治療術これなり。古へより蠶病の豫防はすれども、その一たび之に罹りしものは治療すべからすとせられたり。然れどもこれ藥を桑葉にふりまきて食はしむるが故に失敗するなり。氏の非凡なる機才は、種々工夫の上、明治の初年一外國醫が皮下注射の法に習ひて、蠶の側面にある呼吸門より、藥の氣を吸はしむるとを思ひ付けり。後たま〳〵病魔の侵す所となり、一養蠶室の內に臥すと數日、その身全快して再び給桑の勞を取らんとするや、室內の病蠶も亦いつしか回復して、生氣いや增すを見たり。つら〳〵思へらく、これ正しくわが藥劑のかをりを呼吸して、その痘根の癒えしならんと。即ちおのが藥劑を分拆して、一種動かすべからざる劑料を得たり。これ氏一家の秘密として、未だ明言する能はざれども、既に之に依て實効を奏せしと屢これあり。現今氏が家の入口には、「養蠶病院」といふ小き看板をかゝげあるを見む。

氏はおのが家業に従事しながら、天地間の區々たる細事にまでも、絶えずその意匠を凝らせしが、その機智の迸出する所、嘗て菜種の花を見て、「春氣色菜種の早咲」といふ手品を思ひつきたり。これ電氣熱を利用して、菜種の一粒より、見る〳〵枝を生じ花を咲しむるなり。又おのが矢の羽の亂れてはまたつき揃ふより、粘着力におもひ及び、かの一時名高かりし「鳥の首切」とて一旦鳥の首を斷ちて、また之をつぎ合す法を行ひ初めたるは氏なりといふ、此法はその後に至りて行はれし如き種を用ゐず、眞にその首を切るなれども、即座に之を接ぐが故に、元の如く粘着するなれば、黒白兩雞の首をも入れ易ふると難からず。今の歸天齋正一等の之を眞似るに至りて、氏はおもしろからずとして止めたりといふ。

かゝる興味のいよ〳〵増し來たるや、氏は明治四年の頃、遂に手品師と變じ、青柳春日と稱して諸國を跋渉したり。當時の新聞紙毎日振假名新聞の如きは、氏の肖像を掲げて、その奇術を讃したり。氏の曾て芝區櫻田久保町の寄席榮壽亭に興行せしや、「鳥の首切り」の段に至り、兩手を以て先づ白色なる鶏の首を引延ばし、一觀客をしてその中間を切らしむ、客之を切るはづみに、過ッて氏の親指を落しき。氏之を事ともせず他の黒き鶏の首を切取りて、之を先きの白鶏の胴に接げば須臾にしてもとの如く叫びつゝ、そのあたりを翔けめぐりぬ。滿場の喝采湧くが如き内に、一人の紳士あり、氏の傷を氣の毒に思ひ、金若干を贈らんとす。氏辭して曰く、災難は時の運なり、われたとひ興行師たりとも、故なくして客より金を受くるを耻づと、遂に之を受けざりき。

氏の名ます〳〵高まるに從ひ、氏を疑ふ者いよ〳〵多く出で來り、明治六年本所に興行中、突然林町の番所に呼出され、榮藏といふ探索方の糺問に逢ひ、汝切支丹にあらずんば、能くその辯解を爲すやと、二日間拘留されしとあり。後直に埼玉なる鷲の宮に行く。その地の警部鎌田某は、罪人に唐がらし水を飲ますといはれし程の惡吏なりしが。氏を捕へて、寒中シャツ一枚にて、庭前の枯木に繫ぎ、猶あき足らで、此奴魔法を使ふ故、烟となッて逃れんも知れずと、十數名の邏卒をして氏を取捲かしめたりといふ。又嘗て甲州に在りしや、土地の人民に追はれて、深山に迷ひ入りしことありき。

氏は殆ど十年間かゝる生涯を送りしが、或日一人の友輩來たりて曰く、汝能く奇術を弄すと雖も、未だ切支丹の法を知らず、竊に之が傳授を受けては如何」と。是に於て思へらく、人はれを疑ッて切支丹となせども、行ふところ皆理化學上の道理なり、われに於て何の奇なるとかこれあらん。眞に奇術なるもの若し世にあらば、そはわが喜んで得んと欲する所なりと。氏はその氣に成りて横濱に來たる。浸禮敎會のポート師、あたかも好し、爰にあり。氏はこの師に就て初めて耶蘇敎を聽けり、當時の野蠻妄想の夢今や覺めて、宗敎の奥義を敎へられ、基督のわれら人類の爲めに犧牲となりし所以をさとり、人間罪業のいとも深きを知り、明治十四年、遂に悔悟して熱心なる基督敎信徒となりたり。

氏は素より酒を嗜まず、而して猶その放蕩なる、青柳春日の名は一時世の細腰をして騒ぎ立たしめしなり。然れども、この時に至り、氏が得たる敬虔の念は、全く空しき欲望を去り手品の如きは見易き道理を誇張して、人を欺くものと爲し、之が興行を廢せり。（今日に至りても、たま〱クリスマスの餘興などには、之を演じて見するともありといふ。）恰も生を改めしが如く別人となり、これ迄考へつゝありしおのが發明の上に、全心全力を注ぐに至りぬ。氏自から云へらく、わが彈力機關車は即ち神の賜なりと。

氏がこの機關車を工夫するや、早く既に明治三年に始まる。たま〱二厘錢を竪に持ち、之を他の二厘錢の倒ふれたる上に投ぜしに、一たび前に飛びしもの復はね返へれり。氏之を見ておもへらく、この力は必らず何物にか應用し得べしと、沈思默考すると四年、人皆氏の日夜二厘錢をはね返らすの外爲すなきを笑ふ、氏少しも之を顧見ず、工夫に工夫を重ね、意匠に意匠を廻らし、初めてこの彈力を以て水上機械を造らんと思ひ付きたり。時に明治七年、京濱鐵道成るや、世はじめて滊車の輕便迅速なるに驚けり。氏ひとり笑ッて曰く、嗚、呼馬鹿げたる哉、多量の石炭を燃して漸く斯の如し。わが彈力にして水上機械に用うべくんば、滊車にかはるまた何かあらんと。即ち一層その規模を大にして、竊に世人の知らぬ苦みを嘗めしと十七年。明治廿四年に至り、この發明の必らず見込あるを確信し、同廿五年、はじめて小鐵道の雛形を造り彈力機關車を据ゑ付けて、農商務省にて之が回轉を試み

たり。氣笛の工合までなか〱都合よかりしが、他に猶足らぬ所あるより、また一層の考案を加へ、漸くこの頃に至て成功するを得たるなり。

ニユウトンは林檎の落つるを見て、地球の引力を發見し、ワツトは鐵瓶の蓋の動くに由て、蒸氣機關を發明せり、而して關水氏は二厘錢のはね返へるを見て、遂に彈力機關車を得たり。予機械の事を知らず、故に之が如何を喋々するものにあらず、たゞ氏が經營慘憺たる精神の貫くところを示さんとするのみ。氏や古來發明家の苦心は、悉く之を甞めたるものゝ如し。或は世に疎んぜられ、或は妻子に棄てられ、或は又自個の衣食に窮するが如きは珍しからず。これ發明の爲に萬事を投打ちたればなり。明治廿五年三月の如きは、材料の爲めに火藥を購ひ、警官に咎められ、禁錮せらるべき所、官氏の熱心に感じて、たゞ罰金一圓に處したり。氏のかゝる細事に屈せず、世の毀譽褒貶に頓着せざるは、左の自作の端唄を見て知らるべし。

　發明は出來りや功名、出來なきや山師、
　　首に袋を懸ける迄。

その青柳春日たりし日は、多くの興行の爲めに、名は賣れ、從てその社會の交際も少からざりしが、一たび基督敎を信じて手品師を廢するや、從前の友輩は勿論、新知己と雖も、之を遠ざけて社會の繼子の如くならしめたり。かれ等の內、誰か斯る大發明家のあるを知らんや。然れども、神に對する熱心なる信仰は、氏をして全く身を無きものとなし、社會人類の爲めにこの發明を全うせしめたり。この精神こそ氏の財產にして、世は未だ之を知らざるなり。而して氏の爲めに最もいふに忍びざるは、妻女を九度あらためしとなり。

發明家の工夫を凝らすや、詩人の想をやると同じく、一瞬の妨げも爲めにその全考案をうち碎くとあり。氏の如きは、朝は目ざまし時計に依て三時より起き、夜は必らず十二時に至る。その間一室にたて籠り、時としては厠に行くをも忍んで遂に立つ能はざりしとありといふ。されば細君たる者たゞ皆箕箒の勞を取れば足る。然れども來たる者も來たる者も、皆氏を以て狂と稱し、愚と笑ひ、望みなしとして去るなり。そのいよ〱貧するや、おのが蒲團の切れを賣りしあとの綿にくるまりて、大晦日の夜を過し、明けて元日に食らふ物なく、

止むを得ずその綿の片端をちぎり行きて、屑屋に賣らんとせしに、屑屋も元日なればとて斷りたりき。又或時はおのが近所に食を與ふる者なかりしかば、わざ〳〵麻布より淺草なる知人の處に行きて、朝飯を喫し、而してわが家に歸る迄には既に空腹となり居りしといふ。

爰に殊勝なりしは氏が今の大家の先人、伊東某なる人なり。氏が發明に苦心するを見て、特に家賃を免じくれ、正月などには餅を贈りて大に氏を勵したり。是迄處々を追ひ出されし氏が此際の喜は一方ならず、今にその恩を思ふて、この發明を成功したるが、何よりの回向なりといひ居れり。

氏が收入の道はたゞ蠶病治療術あるのみ。然れども、世人猶この發明をも信ずる者少し、明治十八年の頃、氏は「養蠶痘院」又は「蠶痘治療術」など記せる旗を押し立て、福島地方を巡廻せしに、その旗印の既に奇なるのみならず、至るところ基督敎演說を爲すに由り、人皆切支丹なりといひ合へり。氏の飯野村に在るや、村長は警官と立合の上、氏を呼出し、魔法をつかふて人を欺くにあらざるかを糺問す。氏その然ざるを辯じ、躬づから乞ふてわが治療術の實驗を爲し、村長を

して之が證明書を書かしめしとあり。越えて廿二年、上州大館に於て、大に村民の迫害に逢ひ、なぐれ殺せと騷ぎ立てられしを以て、氏は車の左右を巡査數名に護られて、その村をいでたり。

ついでながらいひ置かむ。明治十五年の頃、氏が故郷の或家に於て、十枚の蠶兒悉く病にかゝり、一家一年の活計之が爲めに傾倒せんとするを聞き、氏身づから之を訪ひ行きしに、一人のいで來たる者なく、その家の戶は內よりかたく釘つけにしてあるものゝ如し。即ち之を蹴破ッて入る。嗚呼慘なる哉、今や一家うち揃ふて縊らんとするところなりしとは。氏之をなだめ諭し、即坐にその多くの痘蠶を癒せしに、その年の收獲他家よりも善良なりといふ。

氏がこの術によれば、白殭蠶俗におしやりといふものを除ては、如何なる蠶痘も、之を治療するに難からざるなり。されは之を信用する者は、氏を招きて病蠶を托するが故に、養蠶時には數百金の收入ありと雖も、機械道具等を購入する爲めには、恰も燒石に水の如し。かの農商務省にて試驗せし鐵道機關車も、今や質屋の倉に投げ入れられたり。夫婦二人の生

活を如何にせむ。今の細君は宗教心ある人にして、既に九年間夫と艱難を共にし、人の洗濯などを爲して、些少の手助けをなすは感ずべきなり。或時は夫婦共に病床に臥し、殆ど死に際せしとあり。氏が工夫の爲めにあまり過度の能力を勞し、遂に激烈なる腦充血に罹るや、友人のすゝめに依り赤十字社に行きしも、治療の見込なしとて斷られたれども、氏はひとり瓢の底を拔き、之を頭上に載せ、護謨管の一端を之が口につなぎ、他の一端をおのが口にして、悉く頭部の膿を吸ひ出し、自から電氣療法を行ひて全快したり。

氏は電氣學上にも亦一の發明ありと雖も、之は後まはしとしてあり。而して百折撓まず、孜々矻々として、彈力機關車の成功を速にせり。氏は大發明家の苦心するところ、悉く之を嘗めたり、而して世人は之を如何とか見る。或は些細の金を貢ぎたるを名にして、氏が多年の功を奪はむとし、或は竊に人を使して、その機關の構造を探ぐらしむる者、これ迄幾人ありしかを知らず。一片の鐵板も、之を穿つに鍛冶屋を賴む能はず。一個の鑢も、之を用うる所以を語るべからず。分業の盛なる世にありても、發明家は鍛冶屋と細工屋とを兼ねざるべからず。氏が胸中の憂ひや實に名狀すべからざるなり。時としては日本全土、一人の知己なきを恨み、時としては又高大なる神の人に吝む所あるかを疑ふ。これ豈情ある人の免がるべきところならんや。

たゞ神の眞理の存ずるところ、之を應用すべからさる理あらんやと、この確信は氏をしてその志をつゞかしめたるなり。望なくして山に入る、何の難きとかあらん。然れども、苟も一の目的を以て世を忍ぶ、既にこれ男子の爲し能はざる所。英雄髀肉の嘆また是にあり。而して氏はこの勃々たる精神を抱いて、二階の一小室に籠城せり。爰に氏は祈禱と共に業を始め、祈禱と共に業を休めり。この祈禱と工夫とは、見えざる靈の外、之を知るものなかりしなり。

余の始めて氏を音訪ふや、氏は古びたる股衣を穿ち、シャツの上に、さるを着ていで來たり、予を導いて二階へのぼせり。一個の古机一個の火鉢あり傍の本箱には新舊約兩聖書と誰かの譯せし物理全志一卷とあるのみ。火鉢の火氣焰々たる内には、一小鐵片のまさに燃えなむとするあり。氏は之を取出して、かな床の上にたゝきつゝ、話し始めたり。頗る快活

の人、毫もその苦心を憂へざるもの丶如し。談漸く奥に入るや、即ち起て戸棚のうちより、氏の爲めに最も秘密なる機關車の雛形を持來り之を予が前に据ゑ、君なればこそ示すなれ、未だ誰にも語るべからずと、その彈力の由て來たる所以を敎へたり。その時の感動今も猶忘れざるなり。氏の情大に激するもの丶如く、肢體は振へ、頭は垂れ、機關を抱いてまさに泣かむとせり。曰く、われ若し基督を信ぜずんば、如何でこの發明を爲し得んやと。予ははじめて、大牧師の說敎を聽ける感ありき。

その後幾度尋ねても、氏の仕事は變はることなし。火鉢に向ひ、機關を抱き、鑢の音、鐵槌の響は絶えざるなり。機械も亦文章の如し、之を組立つるや、一個の穴と雖も、或は右に穿ち、或は左に改め、猶おもしろからずして、遂に全く別の鐵片を用うるに至る。而して或は圓く或は平く或は長き鐵屑の、雜然として室内に轉がれるあり。かの質物となれる鐵道機關車は見るを得ざれども、之に一層の工夫を加へたる機關の臺車は、二貫目ありて、之に水銀の量一貫百目ばかりを合して、三貫百目餘なり。これに由て、水上機械を成すは勿論、蒸氣を廢して、滊車滊船軍艦等を進行せしむとせば、國家經濟の上に於てもその利益僅少ならざるなり。現に明年回航せんとする富士艦に就ても、その消費せんとする夥多の石炭と要せず、從て之に關する機械と場所と人とを省くを得べし。

今やこの大發明の成功して、たゞ數日のうちに其筋の特許を得んとす。世人未だ知るなしと雖も、これ世界に對する我日本帝國の光榮のみにあらず、現今諸派宗敎家の不信爲すなき徒をして起たしむるに足る。氏自作の和歌あり、曰く。

柴垣に支へられたる關水も
　地球をつゝむ海となるらむ。

故にこの彈力機關車を稱して、一名關水機關車といふ。實にこれ殆ど三十年間の苦心に出づ。水山清次郎なる人、之が發明家の一人に列なると雖も、これたゞ近年關水氏の世話を爲したるのみ。

氏は今年五十三歲、幸になほ健全なり。もとより深き學問あるに非らざれば、己れ毫も誇るところなしとし、その成功を神に歸し、將來は必らず自力を以て一の講義所を設け、追々之を敎會と爲すつもりなりといふ。

予や一篇の詩作に從事して、こゝに二年、未だ其第一卷を終らず。時に倦んで興至らさるに逢へば、或は之を廢せむかと思ふと稀ならず。今や天地寂莫の氣、桐葉を剝いで人骨に迫る時、此文を編してわが坐右の訓誡と爲すと同時に、我國同胞の内よりして斯る大發明家の出しを紹介するのみ。（十一月廿八日記）

文藝

書の道

石翁

曾て勝海舟先生に聞く、先生の愛好の書如何と。先生答ふらく、余は太たく霞翁の書を好むと。

近頃足利の知人原田氏余に贈るに霞翁の書をもてす。欣喜して之を視るに、筆勢縹渺、姿力殆んど端睨す可らず、但だ夫れ一種無我の神韻あり、紙面を掠めて脫俗の香芳を發つ。余熟視して敬慕措かず。

之を聞く、霞翁の木賀にあるや、日々揮毫に樂しみて餘念有となし。初め土人大率知らず、ひそかに變物となせり。一人、蕎麥屋を創めんとして、看板の字を依賴し、『うどんそば』の假名五字を書かしめ、店頭に張りたり。后幾何ならず、江戸の士某通行の際一瞥して喫驚し、懇望して止まず金一兩を置きて之を獲たり。店主頗る奇しみ、再たび霞翁に乞ふて第二の看版を書せんとを要む。霞翁笑つて曰く、かの長持を開け、既に幾枚かの認ためたるものあらんと。則ち、其の蓋を開けば、「うどんそば」「うどんそば」と書したるもの幾百枚、長持の半ばに充ち居たりと。

海舟先生曾て霞翁を見て、揮毫を要む。先生當日の狀況を語り、歎じて曰く、霞翁の筆を揮ふや、精神全幅、寸分の間隙、一點の打ち所なしと。就て書道を聞けるに翁の言ひけるよし、曰く、余久しく書を好みて日夜に揮毫し、太たく古の名手に私淑す、連りに試みて切りに平ならず、常に及ばざるを恨みしが、齡四十歲にして忽然として悟了す、余は古人の書の形を學んで其神を學ばざりき。先づ其人となりを學び、吾心之に達するにあらずば、作字亦た到底及ぶ可らずと。之より只管ら心を修めて后に就て書に學び、初めて稍や得る所ありしと。翁は尤も淵明を慕ひ、其字を學び、其詩を寫せしと

多かりしと云ふ。
余が今贈られたる所のものは、翁が七十七年の時の作なると
を知る。
夫れ、純白の紙に臨んで、眞黒の字を引く。至誠筆端に落ち、
勇猛、腕頭に集まる。文字はこれ吾心の明白なる寫眞にあら
ずや。もし心を醜くして、其姿を飾るものあらば、人之を陋
とすべし、而も、自から修めずして偏に字形を正しくせんと
するものに至つては、既に明らかに其の卑きを見すにあらず
や。人安くんぞ廋すとを得ん。筆を握りて紙に臨み、かの孔
明の表に臨んで感泣せしが如く誠實なるものにして、初めて
其字の聖高なるを得ん。

案山子廼舍諸社中詠草

（池袋清風大人評點）

閑居秋風　　備前　伊丹義衞

、、柴の戸をうつむらさめの音やみてひゞくも寒し峯の松風

評　居は柴屋也、時は晩秋也。遠く塵世にはなれ、一種言ふべからさるの感あらん。時に風雨の窓戸を叩くあり、忽歇み、嶺上松濤の響を聽く時、幽思清黙自然と同化すべし。

川霧　　横濱　山口鶴子

、、わたし守よばふ聲のみ聞ゆなり川つら暗き秋霧の中に

評　野渡黄昏の秋景、悽愴際涯なし。

秋夕雨　　函館　竹内梅子

、、群鴉なく音遠くもきこえつゝふる雨さむし秋の夕昏

評　秋夕は年中の歌題中、最雅趣多し、皆寂寞悽愴の幽情を含む。而して善く詠むは易からず、唯自然の景情を述れば秀詠となる。此詠自然の景情を述べたり、冷雨薄暮遠く鴉鳴を聞く、寫し得て寒し。

木村鐙子の墓にて　　東京　湯谷磋一郎

、、面影を思ひ浮べて見つるかな尾花がくれの草川の水

評　和歌は緣辭を善く用ゐれば、感情發するもの也。而も自然の境を越えて、人爲に陷る時は、所謂細工歌となり、寧ろ之を用ゐざるに如かず。此詠は自然にして亦善く緣辭を用ゐたり。例へばおも影は此所死者在世の時の面貌也。思ひうかべてとは、斯樣々々の顏なりしと殊更に考出して見る事也。而して初句、第二句共に水に緣あり、影は水にうつるもの、水面には物の浮ぶものなれば也。さて題は墓にてとあれば、墓は野外にあるもの故、尾花を出したり。尾花は秋の草花なれば、と適合して寂しき也。今尾花がくれの草川といへば、墓の近邊に獨子みて、野川の水を眺めてある景も自然に見ゆるのみならず、地下の死者を追慕の情も顯はれ、而も尾花や草がくれの水を見る如く、死者生時の容貌も朦朧として、さやかには思出さぬ樣の所までも知らるゝ也。僅三十一音なるも善く詠すれば一首にて或ば十首の効をなすもの

也。此批評は註解の如くあまり長くなり、亦歌人は誰も一吟下に知る所なれど、序にて初學の爲に細註を下せり。

折にふれたる　　武藏　市村高彦

、、霧こめてうづらなくなる岡のべをこえ行袖に朝日さす也

評　秋は肅殺の候、天地淸冷、山水澄明、精神爽快、而も其雅趣は悽愴也。此詠の景情は朝霧深き時は、其日は晴天のもの也、秋曉早く起て野外旅行するは、實に爽快なるへし。袖冷かなる霧中、岡邊の徑をたどる時、鶉などなき、漸く霧の間より旭影袖に來り、微溫を覺え、野外の淸景を眺めつゝ行くの快樂、言ふへからず、評者もかゝる旅行をなさまほし。

田家秋夕　　東京　江間喜代子

、、ふく風にひかぬなるこの音すなり垣根の小田の秋の夕暮

評　此詠を譜にかくならば、農夫の一草菴あり、其周圍に粗なる竹垣など結ひ、垣の外は小田にて、稻穗漸く熟し、其上に引板かゝり、其繩の端は、草菴の窓に引きたり。晝間は群雀來り啄ばむ故、窓より繩を引き、板を鳴らすも、此時は黄昏にて、雀も塒に入り、四園闃として、聲なし、唯夕風に折々稻のそよぐが上に、打捨たる鳴子、自然カラ〳〵鳴るのみ。一種寂寞の情生すれば、百感隨て發し、斯る草菴に一生を送る、農夫の憫然を思へば、亦都會榮華の幸福を思ふ。而も人間の富貴貧賤も、幻世の一夢たる事などに及び、自身のはかなきを省み、名利の慾念も消え、死後來世にまで馳するは、雅人宗教家の幽閑なる自然に接して感ずる所の事情也。而して幽閑なる自然は、野外の秋夕に最多し。

花園の下草

寒月　　船越艶子

あすはまた雪げと見ゆる雲間よりもる影さむし冬の夜の月

野寒草　　同　人

風渡る枯野が原のむら薄きさする哀ものこりけるかな

冬竹　　石井久枝子

おほ空もおほふばかりに生しげる竹の林は冬としもなし

待雪　　同　人

雪げかと思ひし空はまたはれて待につれなき夕日さすなり

犬　　櫻井德子

吹風も身にしみ渡る小夜中に犬の聲のみたかくきこゆる

山家冬月　　同　人

あられふる音もと絶て木間よりさえまさりたる月は出にけり

待雪　　成瀨むつ子

入日さへ草さへ枯れし庭のおもに雪だにふれと待わたるかな

同　　同　人

ゑをあさるのきの雀のこゑすなり時雨のはや雪になるらん

寒月　　荒井巳名子

木枯の音もをやみて照月のかげ淋しくもなれる夜半かな

冬竹　　同　人

いか斗つよき心をこめつらん冬枯しらぬまどのくれ竹

史傳

樂聖セシリア (St.Cecilia.)

樂器其數ありと雖も、凡そ世にオルガンの如く、廣く行はれ、多く用ゐらるゝはなけん。學校の唱歌、敎會の奏樂、一つとして之に頼らざるはなし。此オルガンなるもの抑何の世いかなる樂聖が、創めて之を發明彈奏なしにけむ。人は多く之を知らんとはするならん。

傳說に曰く羅馬の聖女セシリア、剏めてオルガンの製作ありたりと。聖セシリアの芳名は、樂界の万古に薫じて、また屢詩人の謳歌する處となり、其貴く優しき姿は、古來多くの畫伯が題目に捉へられて、千秋に傳ふ。讀者或は時に洋畫の寫眞等に於て、秀麗温雅の一美人が、異様のオルガンに凭りて、之を奏でつゝ、天使の群は、其音に歌を合せつゝある畫像を見るとあらん。其美女こそは、即ち樂聖セシリアを想像に浮べて描きたるものなりけれ。

セント、セシリアが傳記は定かに世には殘らで、多くは不思議の昔語の中に傳へられたるぞわりなしや。聖セシリアの世に出でしは、基督降生後二百年餘の時代といひ、羅馬一貴族の娘として生れしとは傳ふ。

頃しも基督敎は廣く羅馬に傳はらず、會々之を信ずるものあれば、四面楚歌の聲を揭げて攻めさいなみ、果ては生命をも奪ふ無慘の有様にて、市民は渇仰をジユピターの神に注ぎけり。然るにセシリアの父母は、夙に暗憺たる世潮を脫して、眞理の影を望み、妖神を棄てゝ、眞神に歸し、衆人の犧牲をジユピター神に捧げんとて其祭壇に廻るの時にも、彼等は竊に其群を遁れて、ウルバンといへる基督敎の傳道者の許に赴きて、眞理を學びたり。セシリアも亦、ウルバンより聖書の智慧を學びて、基督敎徒となれりき。

セシリア天性音樂に長じ、其天稟を捧げて、神の殿に仕へまつりたりしが、其頃世に己が敬虔の熱心を現ずるに適ふべき樂器のあらざるを嘆じて、經營慘憺の餘、天啓の默示を蒙りて、自ら遂にオルガンを創造し、千古の樂界に一新紀元を開きたりき。

敬神の念、いよ〳〵熱誠を加へ、忠信を卓んで丶、神前に奏樂するの際、衷心自ら誓を立て丶、人を愛するの情を以て、神を愛するの念に代ふることあるべからずとなし、其生命を神に捧げまつりて、畢生潔く童貞の女たるべしと決したり。今日は、西洋諸國にて、一生處女の儘にて世を過す女流も尠からざれども、セシリアの時代に在りて、處女の世渡りをなさんことは、セシリアに取りては、いと丶困難の業にてありき。セシリアは我身は己が儘ならぬ、父母のものにてありければ、父母は我娘の志をも知らず、彼女をばヴァレリアンと名づくる一貴族に嫁せしめたりき。而もこのヴァレリアンは猶未だ妖神を棄てざるものなりけり。セシリア此時いかゞ身を處したりけん。あはれや彼女は深き誓を破らじと、神に祈請を罩めつ丶、婚姻の莚に飾る和妙の晴れの衣の下には、荒妙の喪服を着なして、合醮の坐に侍りけり。神は如何でセシリアが清き心の祈を受け給はざらんや、ヴァレリアンも彼女が熱志と雄辯とに感動して、我妻よ、我夫よと互に呼びかはすに至れりし時には、彼は既に基督敎徒となり、セシリアをして純潔無垢なる童貞の生涯を營ましめき。聖靈此時天より下り、花卉を以て二人の頭を飾り、ヴァレリアンに告げていはく、『汝は汝が妻の潔き願を許したれば、予に求むるに汝の欲する處のものを以てせよ』と。

ヴァレリアンの新信仰に熱中するに至りしや、また、其兄弟タイベルチウスの改信せんことを欲したりしに、セシリアの雄辯はまた難なく彼を改信せしめたり。これより三人共に貧しきものを恤み、哀れなるものを助け、殉敎者の寶血を洗ひ、其遺骸を葬ることに怠りなかりしかば、遂に羅馬の知事は、彼等に逼りて、其慈善の行より遠からんことを强ひたり。然れども之を諾はざりしかば、二人の兄弟は牢に投ぜられ、死刑に處せられたり。セシリア今や寡婦の身となるの不幸に遭遇せしかども、信仰依然として變ぜず、たゞます〳〵堅牢なるを加へしのみ。知事は由りて妖神の祭壇を設けて、其前にセシリアを牽き据ゑ、之を拜するか、然らずんば誅戮せん、二者其一を擇ぶべきを命じたりしに、セシリアは此危難に臨んで、端然して、容を變へず、默々たゞ時に微笑を洩せしのみ。其友人等は彼女の傍に周り立ちつ丶、欷歔流涕して其信仰を棄てんことを勸めたれども應ずることなく、稍く其居を開き

て、洩らし出だす其聲は、瀏喨玉を振るが如く、語る處は美妙の節調に叶ひて、よどみなく、恐れなく、神を信ずるの理由を說きたりければ、之を聽けるもの丶中の四十人は立處に、基督敎を信仰するに至れりしといふ。

此時に當りて知事は何ぞ其憤怒を增さゞらんや。命じてセシリアを熱湯中に投ぜしめたるに、セシリア一度手を觸るれば熱湯忽ち變じて水となりけり。さらばとて此度は其首に加るに利刄を以てせしめたりしに、劊手もセシリアが音聲發して微妙の音樂を奏するに心を奪はれ、其手は震ひ戰ぎ、利刄も僅に彼女を傷けたるのみに了りき。其後三日、セシリアは吟歌朗唱をやめず、遂に聲調微弱となり果てゝ、敢なく此世を去れりしとぞ。

古來聖者と尊めらるゝもの、其數ありと雖も、百代の美術界に贊傳嘆美せらるゝもの、セシリアに若くはなし。其美容、其純潔及び其宏大なる音樂の稟賦は、彼女をして、宗敎美術の好題目たらしむ。多くの美術家は、此聖女が秀美溫雅にして高貴なる姿容を描かんが爲めに心を碎き、中にもボロゲナ市に近き某の敎會に遺れる、ラフハエルの作といへる其畫像こそは、世に最も名高きものなりと聞け。詩人の彼女を謳歌するもの亦多く、チヨーサーは、其傳說を歌ひ、テニソンも亦詠じていへり。

壘壁其四方を圍みて、淸らかなる海上の市街の
中に、金色なせるオルガンの管笛の傍に、其
頭髮は、白薔薇の花に包まれて、聖セシリアは
眠れり。而して天使は彼女を守る。

問答

氣むつかしき男子

の機嫌の取り方に困じ果て、如何にせば氣樂にするとを得べきやと問ひ越されたる方あり。氣むづかしきは、一種の病氣の如きものゆゑ、人々によりて看病の方同じからず、手紙の上にて一概に答へ參らするとは相成るまじき儀なれど、他に致し方もなきとゆゑ、只だ其の大躰を

答

へんに。凡そ氣むづかしき人に對する第一の用意は不用意なるにあり。言ひ換ふれば、無頓着なるにあり。彼方が神經質にて物を氣にするより發したるとゆゑ、此方までが物を氣にしては、彌よ〳〵以て薪に油をかくる道理なり。夫故、彼方の額に八の字が見ゆるほど、此方は笑渦の穴でもあけて、無心無邪氣にもてなすべし、自づから之に引こまれて遂には吹出して氣の變るともある惜し。之を一方とす。」又、生得內氣の質にて、外に出でてチット辛棒忍耐したる爲め、家に歸る途すがら、腹中にて獨り立腹し、歸宅すると其儘、海豚の如くプッとふくれて一種の腹いせを爲すとあり。之は必竟、外にて負けたる負惜しみの氣味合より出るものゆゑ、之を慰さるむるは、其の自得の氣を引立つるを專要とす。即ち、事業の事なり、行末の事なり、その極めて望みある方面を自づと談じ合ふか、又は、世間の他人に比べて吾主人の優れたる所を感謝するか、最も好きは、誰某がアナタに云々の禮を言ひました、又は、大相有がたがつて居ましたなどの吉報を思ひ出し、吾も眞實に感謝しつつ喜こんで之を話すなどの氣轉にあり。即ち、其の負惜しみの爲めに氣むづかしくなれる一點に加勢するの主意なり」。或は又、一寸したることを不平に感じ乍ら、其不平を口にも出さず、すねて默つて仕舞ふ氣むづかしやあり、之は、其の最も好む所の事を平生より承知し措きて、之を便じて氣のもつれをほどくを良とす。」或は又、病氣、就中、胃病などの爲めの氣むづかしやあり、之は成るべく、外行をすゝめ、外に引張り出して逍遙し、運動と氣散じとによりて愈やすの外あらざるべし。」もし又、眞に氣の合はぬより、むづかしやとなりたるならば、之は能々省て悪しき僻を矯め、吾志を殊勝にし、女らしき優しき情を養つて、徐むろに信實の愛を惹くを道とす。

雜録

小說 野路菊

紫琴女

（其四）

此所は大坂の町外れ、上福島村の何番地といふに、近頃引越

したる親子あり。あるじは去年脳充血にて世を去りしとの事にて、今は母子二人の淋しき住居。裕かならぬ、生活向きは、障子の紙の破れにも見え透けど、母なる人の木綿着ながら品格よきと、年若き息子の、尋常ならず母に使ふるさまは、何れ由緒ある人の果と。淵瀬の以前知らぬ人も氣の毒がり、水臭からぬ隣りの細君、お秋が提ぐる手桶の、重さうなるを、助けて運び呉るゝ事もあり。差配の隱居の信切に、何なり共御用あらばと、いひ呉るゝも嬉敷、泣きて移りし今の住居も、捨難きまで思ひ成しは、貧に慣れし一徳にやなど、たまには母子の、笑ひ話する事もあり。金之介は學業半途に、呼戻されて、學校を退きし身の、思はしき口とてはなけれど、世話する人あるを幸に、父の沒後は土佐堀邊の或私立學校に通ひて、纔なる俸給に、母子二人の口を糊するを、何よりの事と思ふ身の不運を、心ならぬ事に思へば、爭で今一度青雲の志を遂ぐる楷梯もがなと、精勤更に怠らず、暇あるをり〳〵は、獨學に心を慰むる、若きには似ぬ心掛の、校長にも知られてや其受よし。今日は我方に何か御馳走がある筈なれば、是非に同行して、寛々話し玉へと、深切に勸めらるゝを否み兼ね、

母の嘸待詫び玉はむにと思ひながらも、誘はれて其が方に行き、晩餐の饗應にあづかりたる後、好める學術の談話に思はず時刻を移し、漸くに辭し去りたる頃は、はや仲秋望後の月の、大空に輝く時なりけり。

幾度か雪駄直しの手にかゝりて繕はれたる靴の、急くほど足痛けれど、携へたる紫メリンスの、風呂敷の中には、校長の注意にて母への土產もあるに、心勇みて玉江橋の中程迄來かゝりたる金之助の、足音に驚きてや、橋の欄干に身を寄せたる婦人の、まだも年弱く、月の光を受けて面の色凄きまで蒼白く美しきが一歩二歩歩み出たり。訝しとは思ひながら行過たれど、何となく氣にかゝりて振り向けば、又立止りてさめ〴〵と泣くさまなり。余りの不思議に屢見歸れば。彼方も氣味悪げに此方を見たるが。暫時何事をか打案ずる狀にて金之介の傍へ駈寄り、あなたは若しや兄上樣、イ、エあの淵瀬の若旦那樣ではござり升ぬかと、問ふに金之介は驚きて、よく〳〵見れば稚顔の太く大人びて、見違へたれど紛ひもなきお静なり。如何にしてかゝる邊りに彷徨へるにやと思へど、今は親からぬ身の左右なくは問はず。只訝しげに其顔をうちま

もるにぞ、お靜は涙ぐみながら、言葉せはしく其身のあらましを告げて、年頃の御なつかしさ是非に一度御尋申たしとの心、夢の間も忘れ升ねど、御住居の知れ難さに、今日迄空しく過しなれど、いよ〱來む春よりは藝妓に出されむといふ身辛く。如何にもして一度父様に御目にかゝり、其御指圖をも戴きたしとの願ひ切なる折から、運よくも、昨日髪結のお吉の、福島村わたりに、詫住居し玉ふ御様子との事、母様にさゝやきしを漏れ聞きて。詳しくは分り升ねど、よも知れぬ事はあるまじと、大膽にも今日の晝迄、母様には其所迄と僞りて、福島村まで參り、其所よ此所よと問合せ升たれど、そんなお方は知り升ぬと、いふ人のみにて手がゝりなく。尋ねあぐみし其内に、日は暮れ果てゝ飛ぶ鳥も、塒に急ぐ時となり心細さの堪難ければ、一先家に歸らうと、此所迄は參り升たのなれど、思へば斯く迄晩なはりし身の、何といひ譯したものと、心付ては足も進まず。幾度か此橋を行戻して時を移し。今は歸るに歸られず、いつそ此川へ身を投げむかと、死神に誘はれて居升たのに。計らずお目にかゝつたは、何よりも私の仕合。母様の縁に繋がる私の身、不憫とは思召すまじけれど、是よりお家に伴ひ玉ひ、是非に父様に逢してと。跡は涙にかきくれて、しかとは聞取り難けれど、言の葉末におく露は兩の眼に滿ち充ちて、月に輝く玉とも見ゆるに、金之介は深く憐れを催して、金三の今は此世になき人の數に入りしとの事頓に告げかね、何れにしてもいひ譯なき身の、此儘に歸られじとならば、我の送りてお艶に詫して歸させむは易けれど、扨はいよ〱そなたのお艶にや疑はれむ。母様の何と仰らるゝかは知らねど、兎も角も其望みに任すべしとて伴ひしが、やがて二人の影は橋の袂に消え失せぬ。其夜お秋は金之介より、お靜の一伍一什をきゝて、零落れたる今の身の、袖に涙のかゝる時は親族知己さへ見離せしに、お靜の慕ひ來りし心頼もしく、左迄に父様を慕へるものゝ、金之介の爲悪からむやうはなし。なまじひなる嫁貰ひて、氣兼せむよりはと、先きの先まで早くも思ひ定めしかど金之介の、是迄さへあるお艶の浮薄、爭で容易くお靜を手離すべき、よしなき事をいひ出て、斷られなば恥の恥、夫よりはお靜不憫なれど、返すにしかじといふ詞に。心ならずも從ひて、お秋は其翌朝お靜に代りての詫手紙持せお艶の方へ送り返しぬ。

夫よりお秋は、お靜の事いひ出ては氣遣ひしが。一月あまり經ちたる頃ゆくりなくもお靜よりの手紙屆きぬ。何事と開き見れば。

急ぎ御願ひ申上候此程より母事俄に病氣づき養生かなはず遂に昨夜死去いたし參らせ候今は申上候も淚の種なれど其二三日前より深く是迄の事後悔いたしなき後は何事も御斷り申上候て家財はのこらずあなた樣方へお返し申上私事は下女になり共御めし遣ひ下され候やう呉々も御願ひ申上よと申のこし參らせ候夫に就てはゐさい御目もじの上申上たく候まゝ何事も御ゆるしの上御二方樣の內御越いたゞき候やう呉々も願上參らせ候とり急あら〱申上候かしく」

されど金之介は、思ふよしやありけむ。お秋の心もとながりて、我ゆきて見むかといふをゝ止めつ。只人していはせけるやうは、お艶の遺財は、假令素と父の、彼に與へ玉ひしものなればとて、我の再び之れを受けむやうはなし。但お靜の、外によるべなければとて、身一つにて我方に來らむは差支なし。母上もいとほしきものに思ひ玉へれば、如何やうにも世話なし遣はさむにとの事なりしが、其後の事は如何なりゆきけむ。今も上福島村なる淵瀨の僑居には、老母ひとり淋しげに留守居して、もの堅き息子の、日毎學校に、通勤するを見るのみなりといへり。

されど岡燒連はいふ。お靜は目下同地なる或る手藝學校の寄宿舍にあり。是爭で金之介方に、嫁入るべき筈ならでやはと。何れにお靜は、色淸き世を經るなるべし。（完）

樋口なつ子ぬしをいたむ

戸川安宅

なつ子ぬしの名をしりしは三年の前よりなり、一葉女史の名をしりしは、都の花の匂へる頃よりなれば六年か七年の前よりなり、天知子が文學界てふ雜誌を刊行せられし初に透谷、藤村、棲月、禿木の秀才と共に女史の雅號は世にあらはれ、我もいつかは其人を訪はまほしと思ひぬ、後に今の福山町の家を訪ひけり、あひ見れば世の女博士ぶりの擧動は少しもなく、物語る聲は朗なれども低く、丈も小さく花々しき粧もなく、さればとて世のそげ者とか云へる有樣もなし、廿三四とか聞くに世帶くづしの女房のごとく、浮世の波の辛きも苦き

も甞め盡くしゝに似たり、さりとて起居擧動のおとなしきは深閨の處女のごとし、しみ〴〵と語れば萬事を獨斷する意氣あるともうかゞはれ凜然たる心のふしありき、何某學士を訪はれよとか、何博士を尋ねられよとすゝめだちて勸むれば、いと喜ばしくは見ゆれど、みだりに名ある人の家にゆくもいかゞと終に訪はれしこともなし、なによりも悅こばるゝは和漢の書ことには飜譯小說なりき、不知庵君の罪と罰をかしまひらし、時にはいと〳〵悅ばれ後の日に來られて操り返し〳〵數度よまれしと云はれぬ、源氏物語は好まれしと見え、いと鮮明なる大本に父君とかの註釋せられしがありき、されど西鶴の文致には負れし所多ければ、恐らく愛讀の第一ならむと思へど、今の露伴、紅葉二子の小說よりして學ばれし方が多からんと考ふるなり、さすが女性のいと精細にして一冊の小說をもおろそかには讀まれざりしなり、歌も書も中島歌子ぬしより學ばれて手跡も和歌もいと〳〵めでたけれど、心の一ふしあることは自然とあらはれたり、或時の歌に

世の中になかれてのちはしられねど
我が山清水きよくもあるかな

と云ふがありき、常の人のよむ歌にはあらじ、歌子ぬしをは母のごとく花圃ぬしとは姉妹のごとくに見えたり、余はその親族のことを深くは知ず、何事も霞をへだて霧たちこめてうかゞひしのみ、たゞ今も耳にのこるは母を養ひ妹を育て、まだうら若き身をもて世渡りの辛苦をなめ、商ふ品のしこみをすませては、歌の會に來りしと云へる話なりき、都の花は蕾のころ、文學界は初花にして、太陽は咲きもそろはず散りもはじめず人はみな筆の色香に醉ひしに咄、一葉散るあはれとなりぬ、今は美の神のふところに、温められて、冷やかなる下界の闇を見おろしてやおはすらん、我は闇のなぐさに遺物となりし女史の筆の跡をながめ「我が山清水きよくもあるかな」と詠じをはりて眼をとぢぬ、余は築地本願寺の傍にて人となり、女史は智相院妙葉信女と名づけられて芳骨を亦た本願寺の中に埋められたり、奇緣なり奇遇なり眼を開けば女史は去り、眼を閉づれば女史は來る、女史は廿七の齡にて世を逝ると雖も、散りしは相の一と葉なり、噫また何をか云はん。

四季

紫　菀

春

のぼる朝日は　花の香に
つゝまれながら　にほふなり
時を得がほに　うぐひすは
かすみのおくに　うたふなり。

夏

ひとむらすぐる　ゆふだちに
うき世のちりは　あらはれて
みどりしたゝる　こずゑより
もれでる月の　かげすゞし。

秋

千里のほかも　見ゆるまで
さやかにすめる　そらのいろ
山のにしきは　うすく濃く
ながるゝ水は　いとぎよし。

冬

見わたすかぎり　野も山も
ましろのきぬに　つゝまれて
春にしられぬ　木々のはな
さしくる月に　にほふなり。

○歌のかず〳〵　花圃女史撰

山家紅葉　中川なか子
さぢこめしまばのいほりのもみぢばは靜心なくひとりちる哉

山路菊　下野桂香女史
もみぢ葉のいろはくれゆくみ山路にいよ〳〵志ろし白菊の花

閑居秋夕　同人
世のうきを遁れし身にもなか〳〵にのがれがたきは秋の夕暮

寄菊祝　橋本丹江
御園生にさきあまりたる菊の花一つを千代と見るべかりけり

山家紅葉　天野定子
なにごとも世におくれたる山里に先づ染め出る峯のもみぢ葉

山家秋夜　東京廣川すゞ子
猿なくみ山のおくに月さえて置霜しろし夜やふけぬらむ

田家霜　同人
賤が家の門田をめぐる小河のみのこしてけさは霜ぞふりける

時文

○支那文明史論

中西牛耶氏著　博文館版　定價金三十五錢

中西牛耶氏の著す處『支那文明史論』博文館より出版せらる論する處、漢族文化の最大原因、社會の基礎たる家族、政權及法則、哲學及文學、孔子及儒教、支那帝國の將來其の他の目あり。支那文明史の大畧概論を窺ふに足らん乎。著者自ら稱す、これ蓋し支那史の骨髓を拔きて之を示したるものに過ぎさるのみ、故に其文字や精詳ならす、其引例や該博ならず、然れども支那歷史の過去將來を觀測するに於て、世の支那史論者に異なるの點あるを確信するものなりと。

○カルバート

吉田基治著　教文館版

この書は十九世紀の前半時代に於て、フイジー島其他の諸島に、基督教の福音を宣傳し、其の野蠻なる食人々種を化して、文明的生涯を營ましむるに至らしめたる、剛壯勇偉なる英國傳道者、ゼームス、カルバートの傳記を錄するものなれば、教內の人士は勿論、教外の人士と雖も、之を讀まば、其英風の欽すべきによりて益を受くること多からん。

○日本お伽噺第二編 田村將軍

漣山人著　博文館版

例の如き文字、少年に面白がられんとや必せり。附錄『カンカラカンの雁』また面白し。

○江湖文學第一號

『東亞說林』の復興せるもの『江湖文學』と稱して世に出づ、其体裁甚だ『帝國文學』に似たり。

○阿蘇のけぶり

女子學院の出身にして、一時高田女學校にも教師の任にありたる故安田いは子の

遺詠及其の友人の弔辭弔歌を蒐めて出版し、知人の間に分ちたるものを名づけて『阿蘇のけぶり』といふ。

○小說六佳選

博文館版

文藝俱樂部臨時增刊として博文館は硯友社中の小品を蒐めて、『小說六佳選』を出せり。

鏡花の『龍潭譚』は一小兒が、魔物に魅せられたる物語にて、作者が例の得意なる慘酷ものとは筆法を異にすれども、魔物を描くのあたりの手際見るべし。

天外の『蝶ちやん』（メルヘン）は、初めの程は、何か意味多かりさうに見えて、終りは小兒が蝶に化したる御伽譚なり。

芙蓉樓の『人吹風』は、大工庄太郎の女房お紋が、亭主思ひの極、庄太郎を土足にかけて譏謗した鐵五郎を傷くるの話、しかし人一人も殺さなかつた處が、今の人殺が好きな小說家中に、一ふし異つた處か、全体の筋道文字よく整ひてよむべし。

柳浪の『淺瀨の波』にてはまたまた柳浪が例の深酷なる筆鋒を以て、人を殺したり。三吉なるもの、其情婦の新造お勝を愛して、其の中久しからんとの策畧として、娼妓東雲に通へるをお勝は知らず。お勝はまた三吉との交り絕えぜしとの方便より金箱に辨三なるものを騙かしつゝありて、三吉は之を知らず、然るに一夜双方の秘密互に他より發覺して、心事共に知られざる間に血を流し、肉をきざむの慘景を呈して、新造殺の噂、世上に廣まりたりといふ話、篇中人物の住まへる如き社會にては、之が普通にてもあらんかなれども、如何に巧みに巧みて、不自然の處なきかと、評者等は想ふなり。

風葉の『失戀詩人』は一の諷刺譚にて、水蔭の『夫婦之禮』も實がなくて道化めきたり。

六佳選中にて見るべきものは、柳浪と、芙蓉樓となるか。

○新小說初陣揃

春陽堂版

博文館の『小說六佳選』を出すと、殆ど時を同じうして、春陽堂よりは、新小說の號外『初陣揃』を出だせり。『小說六佳選』中の作家は、これまで多少世に文名

をなしたるものゝみにて、志かも紅葉山人の後楯あるなれど、その『初陣揃』に在りては、それ〴〵けなげなる初陣の文士が、其筆鋒を競ふ所といふ。

二十二散史の『鹽焚烟』は、九州鐵道線の一小驛に、松野一郎といへる驛夫ありしが、この者其下宿先の娘おすみと相ひ思へり。然るに其所の驛長の根本といふが、其娘の母及び某といふ老婆によりて、松野とおすみとの中を裂き、松野は憤怒の餘、其職を辭して博多にゆき、其織物會社にて運よく身を仕上げたり。然るにおすみ、松野の情愛は變らざりしに、松野が丸髷姿の藝者と一時の興にて寫眞をとりたるものが、おすみの目に入りて破胸の餘、いや〳〵ながら根本と婚す。松野それを聞くや失戀の餘自殺を計りたるに友人の勸めにより伯母の娘と婚せりといふ話。

小泉三申の『雪解水』は、もとは奥州二本松の藩士にて士族の商法に見事失敗したる大川平馬の遺子未亡人をば、平馬生前の恩義によりて、二本松の俠客清五郎の引き取りて世話する處に、清五郎の二男俊三と、大川の娘お芳との間に情交の成り立てたるとをば僅に知るものは、大川の母ありしのみ。然るに清五郎はこれ又大恩うけし阿部屋の大旦那の遺囑と、若旦那の依賴とによりて、お芳を阿部屋に嫁せしめんと計りしに、其議圓滑にをさまらず、結局俊三お芳失踪することより、清五郎義に欠けたりとして屠腹し、俊三お芳は阿部屋の媒介によりて結婚し、なほ同家の世話にて、俊三は學資を得て勉學の途を開きたりといふ話。

島田小葉（女姓なりとか）の『雨もる家』は、浪花の榛花長屋に假住居せる母娘二人ありて、母はお鹿野、娘はお秀といふ。貧苦に逼りたる末、お樂なる惡婆の誘惑によりて、お秀の藝妓にならんとせしに、巡査櫻田文次に諭されて、思ひとゞまり、其親切によりて、生活の途も立て行く運となりし自然の結果に、櫻田、お秀の間に戀は成り立ちたり。お秀後にはまたお樂に欺かれて杢原なるものゝ妾にせられる處を危く逃れて、また櫻田に救はれ、遂に葉村なる巡査の媒酌にて結婚する話。

三篇ともに戀愛譚にして、初陣なる割合に、いづれも可なりの作なり。然れどもまたとり出でゝいふべきふしもあらず。其中者二篇はやゝ細工に失したるやうにて、後の一篇の文字は、幼稚なれど無難。

○照日松　麗水作　春陽堂版

室町將軍の末世に當り、堂上公卿に中納言藤原の公正といふがおはして、頻に朝家の式微を嘆じ給ひ、また其姫君照日姫は心いと雄々しくて、嵯峨の清凉院の大推和尚に隨って武を講ず。照日姫夜斯波家の家來の狼藉を制して、武士數人を殺したる事より、姫は坐敷牢に幽せられ、公正卿は甲州に左遷せられたり。大推和尚及武州石神井の城主豐島勘解由の弟泰明、公正卿を奪ひたるも、公正果なくなり玉ひ、卿の遺言によりて、泰明照日姫と婚せり。新枕また溫かならぬに、江戶の城主太田道灌と豐島家との間に戰亂起り、豐島家滅亡し、姫また自殺するものがたり。この小說にては、太田道灌の心緒を亂さしめたる、山吹さく家の少女は、この照日姫が忍べる姿なりとなせるなり。もとが報知新聞續物の事故、回數も長く、舞臺もにぎやかに、俠僧、美人、惡僧、勇士、山賊、公卿、田舍娘、老女、姫君、惡武士などありとあらゆるものをつれ出し、文章とても、麗水此度は弦齋張りにて、婦女子に面白がるやうものしたり。『さよ時雨』よりは無難に出來上りて、かれよりは一層面白し、志かし文學上の價値は新聞小說丈けの事なり。

○鷲の羽風　弦齋作　春陽堂版

これまたかつて報知新聞に見えたるもの。作者の序に曰く、此篇の如き今世の所謂る三文學者流に形似を論ぜらるゝを欲せず、期する所は天下後世をして明治の社會に此の大抑壓大變動ありしを知らしむるに在るのみと。偖ても小惡き迄の廣言かな、恐れ入りて批評も出來ぬかなれど、後世の人は何といふべきかは知られども、吾人の見る處にては、弦齋の作中にも此程つまらなく讀まれしものはなし。測量技師が鷲を退治し、肺病やみの女を妻にせんが爲めに、測量師をやめて醫學生となる話、もと〳〵寓意に成つたるにちがひなきも、まことに面白からぬ作なり。

片戀○文庫の批評は次號

ゆふくれをよそに預けて紅葉かな　千代

女學文壇一斑

十一月上半期

◎女子教育論（承前）（西村茂樹）　婦人弘道叢記第二十六號
◎婦人と教育の進步　教育時論第四百十八號
◎夫婦論（田口鼎軒）　君民同祖第二號
◎女子の遊學　女鑑第百二十一號
◎女子教育一斑（三輪田眞佐子）　同
◎女子の職業（女教師及び保姆）　報知新聞連載

片々

◎一葉女史　ゆいて今年の女流文學界は、正に三作家を喪ふに至れり。女流文壇實に寥々の感なき能はず。此時俟つものは、幾多有爲の女作家なりとす。

◎第二閨秀小說　は來年博文館の手によりて出版せられんとすといふ。賤子ゆき、稻舟ゆき、一葉また逝きたる後の閨秀文界に、新たに如何なる女性が、嶄然として頭角を卓で來るべき。

◎一葉遺稿　齋藤正直正太夫、戸川秋骨、大橋乙羽等紅葉、露伴、鷗外等の贊助を得て、一葉女史の遺稿を編纂し、來春早々博文館より出版さらるべしといふ。

◎『小公子』　一葉女史遺稿の出版と同時に、若松賤子の『小公子』は上下卷を完結して同じく博文館より出版せらるべく、旣に印刷に附せられつゝあり。

◎本誌の　『大和心』を合併するや、讀賣新聞は之を佛教雜誌と基督教雜誌との合併と稱し、福音新報もまた同樣の評言を加へたり。

◎半歐化の豚犬　予が『女德の美觀』のはしなく福澤氏說と共に『女鑑』の加藤某女史の駁論を受くるや、國光記者は奇しくも吠え立てゝ、女鑑大に氣焰を吐く、江湖の女流能の呑込でおけ、二夫論者は半歐化の豚犬耳と喊ぶ。予や福澤氏と共にならば豚犬の仲間入りをなすともまた實に至幸。（鷗村）

◎日本の家庭增刊　日本の家庭は是れまで每月一回發行の處來年一月より每月二回に改めらるべしといふ。

◎東京市內の小學女教員は　正教員二百二十九人、准教員百三十四人、中市立學校の正教員は百六十一人、同准教員六十五人、私立小學校の正教員六十八人、同准教員は六十九人。

◎女教員養成所　東京市內の女教員養成所は都合五ヶ處あり。即ち高等女子師範學校、小學教員速成傳習所、音樂學校唱歌講習所、共立女子職業學校、家事專科教員傳習所等なり。

◎東京市內幼稚園及び保姆、の數は左の如し、

	幼稚園	保姆		幼稚園	保姆		幼稚園	保姆
麴町區	四	一三	神田區	四	七	日本橋區	四	八
牛込區	二	六	赤坂區	二	五	芝區	二	五
本所區	二	五	深川區	二	五	京橋區	二	四
小石川區	二	四	本郷區	二	四	淺草區	二	四
麻布區	一	二	四谷區	一	二			

此外なほ華族女學校の幼稚園及び高等女子師範學校の幼稚園あり。

◎保姆養成所　東京市內の保姆養成所として、本年十月新に設立されし、高等師範學校保姆練習所には、十五名の生徒あり。なほまた東京教育會附屬の保姆傳習所なるもの九段坂に在り。

◎高給の女教員　を使用せるもの、東京にては日本橋坂本町小學校（十七圓）麴町區富士見小學校（十六圓）同區番町小學校（十五圓）にて。其所の女教員は八圓乃至十二圓なり、また裁縫唱歌等の專科教員は七圓乃至十五圓を受く。

◎田口鼎軒　夫婦論の要に曰く、人間社會に於ては、一の男は一の女と偕老の契を結ぶのみならず。欲張りたる男女に至りては、未來までも一つ蓮花の上に坐せんと欲するものなり。此の奇異なる現象の原因は、人類の記憶力に歸せんとす。今日多數男女は皆夫婦制を便利とす、故に親族相婚若くは奸通を禁ずべし。但し人類旣往の歷史は決して然らず、從ひて將來亦然るとを保せず。親族相婚の事たる決して物を盜み、人を傷くるが如く、他人を害するの行にあらず、吾人の祖先は皆之を行ひて此大なる人類を世界に發生したるに非ずや。然るに今日の宗教の之を禁じ。今日の法律之を罰するは、全く今日の風俗と異なりたる行爲なるが故の理由たるに外ならずと。

時報

◎樋口一葉女史逝く、

『たけくらべ』『濁り江』等を以て、文名隆々、有髯男子小説家流をして後に瞠若らしためたる一葉女史樋口夏子には、本年七月の頃より肺病に罹り、文壇の爲め其速に平癒せんことを祈りたるに甲斐もなく、醫藥遂に其効を奏せず、十一月廿三日午后七時享年、廿有七歳を一期として、遂に簀を易へ、天下共に之を愛惜す。

◎水彩畫展覽會

上野公園にて開會中なる、明治女學校新築費義捐水彩畫展覽會は、中々の好況にて、本月十三日まで延期開會し、大隈伯爵夫人の紹介によりて、諸外國公使陸續參觀あるよし。

◎肥前の女大夫奥村五百子

嘗ては巾幗潘柳の身を以て、韓山の内地を跋渉し、朴泳孝を始め、多くの志士と交を結びて、慷慨悲歌の間に孫娘の劍を舞し、俠情一片彼等亡命者の爲に盡捽する所多く、其の嬌名は朝野知名の士に傳唱さるゝ、肥前唐津の女丈夫奥村五百女史の逸事、及び近狀を聽くに、女史嘗て近衞篤麿公を訪ひ、唐房灣の利あるを說きたるに、近衞公は後に到り假屋灣あるを耳にし、頗る激して女史を詰責したる所、女史乃ち從容として、具さに其利害を辨じたれば、近衞公大に悟る所ありしと。今回唐津の貿易港となりしも、畢竟女史の力多きに居れりといふ。右に就き唐津舊藩主小笠原子は、女史に左の如き國歌一首を贈りぬ。

いさましき君か勳にふるさとも万代かけてさかえゆくらむ

又女史は大隈伯の知遇を受け、伯は甚く其の公共事業に熱心なるを感賞され、秘藏の西洋農具三個を贈與されしが、其農具は頗る工夫を凝らせしものにして、最も輕便なりと。近頃女史は肥前國東松浦郡切木村原野の開墾事業に着手せんとするの計畫あり、同原野は大凡一里四方にして六百餘町歩あり、內六十町歩ばかりを開墾して、大桑園を作る筈にて、目下其土壤一斤を佐賀縣簡易農學校教諭西村農學士に托して、土壤試驗を爲さしめたる由。尙ほ女史は唐津港に製絲所を設置せんとし、目下盛んに西洋農具を買入れ、製絲傳習工女を養成するなど、專ら準備中なりと云ふ。又た女史嘗て韓山に遊びて語音の不通に困却せしより、朝鮮語學研究所を創設するの必要を感じ、唐津貿易港の開けたる今日、更に一層其設置の急務なるを知り、釉山郡長等と協議する所あり計畫頗る熟しぬ。女史が公共事業に盡竭すること右の如くなれば、地方の人士はいたく其の精神に感激し、影募留ならずとぞ。因みに記す、女史は唐津市札の辻橋畔に家し賣茶を業とすれども多くは外に在りて男子の議に參與し、又た家事を顧みるの暇なきより、家事一切を擧て長女年子に管理せしめ、年子又た能く簡何の任務を取りて、母刀自の運動を助くると云ふ、女史に令息奥村勢一氏あり、目下橫濱に商業學を修め、小林商店に外國貿易の實務を見つゝあり、異日高等商業學校に入學せん志望ある由、又みつ子と云へる季女あり、前後五年間上州にあり、養蠶製絲の業を學びて其科を卒へ、目下福岡縣長糸製糸所にあり、蓋し同製絲所には唐津町及び唐津村より十六名の製絲傳習工女を募りて、養成を托したればみつ子は無給にて同製糸所の製糸業を助け、以て右工女の養成に報酬せん旨意なりとぞ。（毎日新聞）

◎孤女學院義捐慈善市

大須賀亮一氏の設立にかゝる玉子瀧の川孤女學院の事業を賛し、金員を義捐せんが爲め、小鹿島峯子、添田季子、吳久美子、小宮珠子、元良米子の五女史、發起となり、明治三十年四五月の交を期して、慈善市を開設せらるゝよしにて、此頃天下有士の贊助を仰ぎつゝあるとは、本誌社說及び廣告欄內を見るべし。

◎桑名婦人會組織

伊勢桑名町に於て、三四年前より婦人會組織の計畫ありしも、種々の事情ありて其の運びに至らざりしが、今回愈よ時期到來し、同町の福井尊祐、梶島茂吉氏外數名の發起となり、數十名の贊成者を得て去月廿二日發會式を擧げたり。當日の來會者は、松岡郡長を始め長瀨大尉丹羽醫長等、數十名中々の盛會なりしよし。

◎怜悧の盲啞女米國に在り

米國ボストンの某陸軍大將の女にて、名をヘレン、ケラーとて十六歲になれる處女あり。生れながら觸感の外には、何の感覺もなきに、先頃ハーバード大學の入學試驗に首尾よく登第して、今そこの學生になれりといふ。この女受驗の際に、教師の唇に手をあてゝ、その動作によりて、よく試驗問題をさとり、答案をば「タイプライター」（手にて押捺すべき印刷器）にて、みづから明らかに書きたりといふ、此女子七歲のころまでは父母も、見かぎりて、打らすてありしが、今より九年以前に、ボストンの盲人學校に入學せしめたり、かくて後三年をへて、發音の術をさとり、後轉じて、ニウヨークの盲人學校に入りて、いよ〳〵はげみしが、遂に手を人の唇にあてゝ、たやすく人の言語を覺るに至り、今は英語、獨乙語、佛語をも、自在に曉り得るといふ。

明治女學校書籍館寄贈報告

第一回

一 エリオット無機化學◉ウオーマン獨語案内◉ペトラー氏アナロヂー、オブ、レリヂョン◉ウッケ基督教倫理◉デナー大地質學◉ホップキン心身相關論◉クムビ基督の模範◉バルデーン大修辭學◉ヘーブン心理學◉クリスチン、井ーヤ◉英文家政書◉ソールントン家庭禮拜訓◉佛教及基督教◉基督教及哲學◉日本西教史◉日本現今及將來の基督教◉天地大原因論◉スウ井ントン萬國史難句解　各一部　村田武治殿

一 物理學原論　一部　著者　木村駿吉殿

一 女學雜誌　三百五拾七冊　鈴木弘恭殿

一 大宮氏日本辭林　一部　森口直次郎殿

一 家永氏萬國史綱　二冊壹部　日下部增七郎殿

一 本居氏詞の王の緒　壹部　著者　三戸顯子殿

一 理化示敎　壹部　著者　宮本久太郎殿

一 靏種製造篇　相馬愛藏殿

一 平家物語抄傳抄　壹部　木村半兵衞殿

一 女子の本分◉女子處世論◉松の落葉　著者　三輪田眞佐子殿

一 カックンボス小文典◉ホーソルン神人譚　各一部　小野澤操子殿

一 金五圓也　齋藤時尾殿

一 金五拾錢也　片倉亮殿

一 金五拾錢也　松尾義男殿

一 カーライル佛國革命史論　三冊一部　A B C D殿

一 パイロン詩集　一部　見田たね子殿

一 地質學敎科書　一部　著者　横山又次郎殿

一 魯敏孫漂流記◉海人藻芥◉痴談◉勅諭續纂◉阿膠並圖石炭

一 編並圖◉石炭編◉山油編　各一部　平野師應殿

一 パーレー萬國史◉コルチル地理書　各一部　高野彌吉殿

一 布氏道德學　瀨下清通殿

一 英文典敎科書　一部　著者　松島谷口兩氏殿

社會學會會員募集

一 本會は社會學の原理、社會主義、社會問題等を攻究するを以て目的とす。

一 本會の趣旨を貫徹するの方法は講演及雜誌發刊の二とす。講演は春秋二回開會す、臨時茶話會を催す。雜誌は毎年四回、三月六月九月十二月發行す、「社會學雜誌」と名く。

一 本會の目的に同意の者は何人と雖も入會することを得入會せんと欲する者は住所姓名を詳記し之を專務所に通知すべし。

一 本會々員は會費半ヶ年分金五十錢一ヶ年分金一圓を本會事務所に宛て一月七月の兩度に收むべし三ヶ月分二十五錢宛收むるも妨げなし。

但在地方會員は入會申込と同時に半ヶ年分若くは一ヶ年分を收むべし

一 雜誌は當分四季一回發行して會員に頒布す會員外の有志者は一冊に付三十錢送付すれば呈すべし。

一 本會の趣旨を賛成し半ヶ年金一圓五十錢、一ヶ年金三圓を收むるを維持員とす。

一 會員は本會の講演に出席し寄書、質問等を爲すことを得。

一 事務所は東京市下六番町六番地に置く。

一 附、雜誌發行に至るまでの記事報告は「日本宗教」に掲載す、第一會、及雜誌初號發刊は來春とす、會費は來る一月よりの計算とす

東京市麴町區下
六番町六番地
社會學會事務所

右主幹
靜淵　布川孫一

特別贊助員

（いろは順）

藤本善治君	本多庸一君	横井時雄君
横山雅男君	田口卯吉君	津田仙君
大西祝君	加藤弘之君	片山潜君
呉文聰君	三宅雄次郎君	島田三郎君
元田作之進君	元良勇次郎君	

江湖文學

去る十一月二十日發行 **第壹號** 定價一冊金九錢郵稅壹錢

目次

江湖嗎言 江湖の文士に寄語す○小說の傾向○道德の情操○支那文學の研究○福澤翁と加藤博士○今の學風○田舍の氣風○今の文科大學卒業者○民を愚にする法○首なし羅漢○所謂人物の養成○所謂德性涵養○今の敎育○所謂敎師根性○國史大系の出版○新聞の附錄文學○俳諧雜誌と句集○闇のうつゝ○鈴舟と露の蝶○小說六佳選○宗敎○評家と作家

六冊前金郵稅共五十七錢 ◉ 十二冊前金同一圓八錢

東京本鄉區本鄉六丁目五番地
發行所 **江湖文學社**

發賣所 東京本鄉六丁目 **哲學書院**

鈴木弘恭大人講述

第六版

百人一首講義

附錄 小倉のてびき

正價金廿八錢郵稅四錢

本書の講義甚た叮嚀親切なる、又其釘裝の頗る清楚なるは、世上既に公許ある處にして、版を重ぬると、亦六回に及へり。小倉山莊の障子に、百人一首を撰書して、幽寂を味はへりし、定家黃門の樂趣を知らんとせば、此講義に就くに若くはなけん。

發賣所 東京麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

附錄畫豫告

今般札幌農學校敎諭哲學博士新渡戸稻造氏より本社に宛て、獨逸國繪畫界、近代の絶品傑作の寫眞數葉貸與相成りたるに付き、之を寫眞銅版畫となして、即ち本號の如くに續々本誌に挿入し以て讀者諸氏の高覽に供し、佳趣美想を促がさんとす、由て右預め廣告候也。

明治廿年十二月

女學雜誌社白

日本宗教界
評論の評論

日本宗教

十一月二十日刊
第二卷 第五號

◉次號には、橫井時雄氏、ロイド氏、片山潛氏、久津見息忠氏、の社會の罪とは何ぞや◉觀潮菴の人生目的論爭を觀る◉海老澤氏の禪宗及禪學の誤謬◉社會學的宗教觀の性質◉獨逸の宗教界◉某子の信仰經歷談◉其他數篇過半は机上にあり◉

口繪 信望愛

定價一冊八錢郵稅五厘 六冊郵稅共前金四十八錢

東京麴町區下六番町六番地第七號舍
發行所 日本宗教社

◎歌詠募集

◉季、雜、戀、其題は何にてもよろし。短歌今樣ともに、有志の投詠を待つ。
◉投詠ありたるものは、三宅花圃女史の撰を乞ひ、其秀逸なるものを掲ぐ。
◉所々の歌會の兼題、即題の撰も入りしものは、其儘撰者の名を附して掲ぐ、たゞし天地人の點あひたるものに限る。
◉寄詠は凡て本誌毎月十日發行に載す。

社告

今般女教社發行『大倭心』を本誌に合併致候に就ては是迄『大倭心』の方へ前金御拂込みの讀者諸氏へは引續き本誌相送り可申候間其旨御了承なし被下度候其內御異存有之候向は至急御通報相成度候也

女學雜誌社白

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年十一月九日印刷
明治廿九年十二月十日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可

